

目 次

本 尊 論 (初 篇)

日蓮教學講座(第二十回)……………河合 陟 明

法華經講話(第二十一講)……………小 林 一 郎

○ 編輯室より
○ 寄附團費誌料領收

第 十 四 年 九 月 號

統

法財
人團
統
一
團
發
行

財團統一團趣意

統一團ハ創立以來實ニ三十有餘年ヲ經過ス其間内ニ佛祖正脈ノ法統ヲ闡明シ外ニ我國精神文化ノ精髓ヲ宣揚シ能ク萬代不易ノ大道ヲ擁護シ又能ク時代對應ノ教化ヲ旺盛ナラシメ以テ文化ノ向上發展ニ貢獻セリ此ノ光輝アル歴史ハ決シテ他ノ追随ヲ許サザル所ナリ

統一團ハ本團自身ノ活躍ノ外本團ガ母體トナリテ幾多ノ子會ト事業トヲ產出セリ其ノ首ナル者ニ就テ見ルモ天晴會アリ地明會アリ講妙會アリ自慶會アリ又知法恩國會等アリ其街頭宣傳ノ如キ炎々タル道念ヲ喚起シ多大ナル感動ヲ與ヘタルヲ見ン 又著述出版ニ於テハ大藏經要義 法華經要義 日蓮主義精要 聖語錄等著書ノ量ハ實ニ等身ニ超エ雜誌トシテハ毎月統一ト教トヲ發行シ來レリ

統一團ハ過去ニ於テ如斯多大ナル活動

ヲ有スル名譽アル正定聚ナルガ創立者本多日生上人遷化後其遺命ヲ遵守シ進ンデ法人組織トナシ新ニ本部ヲ建設シ將來ニ向クテ重大ナル任務ヲ敢行セント欲ス 其中心ノ事業ヲ舉グレバ

第一佛祖正脈ノ法統ヲ擁護スル事 第二我國精神文化ノ精髓ヲ體系的ニ發揮スル事 第三此ニ適當スル學風ヲ振起スル事 第四時代對應ノ教化ヲ研討シテ之ヲ實行スル事 第五小ニシテハ日蓮門下ノ爲メ太ニシテハ我國文教ノ爲ニ每ニ覺醒ヲ促シツ、嚴然トシテ統一ノ學風ト教化トヲ守持スル事はレナリ

教旨ノ正明 研學ノ調達 活動ノ旺盛 此等ハ統一團ノ標語ナリ

寔ニ佛祖ノ法統ヲ擁護シ我國ノ精神文化ヲ闡明シ此ニ適スル教學ノ特色ヲ永久ニ保持セントスル本團事業ノ翼賛ハ最モ根本的ノ大善事ナルベシ 希クハ同感ノ士女奮ツテ贊同アラン事ヲ爲法爲國爲一切衆生切ニ懇望スル所ナリ

本團略則

- ◎目的 本團ハ日蓮教學ノ心髓ヲ講明シテ佛祖正脈ノ法統ヲ擁護シ我國精神文化ノ精髓ヲ發揮シテ國民精神ノ根柢ヲ培養シ立正安國ノ大義ヲ宣揚シテ以テ理想ノ文明ヲ建設スベク街頭布教並ニ教化講演會ヲ開催シ又月刊雜誌「統一」ヲ發行ス
- ◎維持員 本團ノ事業ヲ翼賛シ一時金參百圓以上又ハ毎年金拾圓以上ヲ寄附セラル、方テ維持員トス
- ◎贊助員 一時金百圓以上又ハ毎年金五圓以上ヲ寄附セラル、方テ贊助員トス
- ◎正團員 一時金參拾圓以上又ハ毎年金貳圓五拾錢ヲ繳出セラル、方テ正團員トス
- ◎入團 御希望ノ方ハ宿所氏名ヲ明記シ適當セル金額ヲ添附セラルレバ本誌ヲ無料ニテ頒布シ團章壹個ヲ贈呈ス
- ◎誌友 統一誌ヲ購讀スル方ヲ誌友トス

本 尊 論

其 一

古今の學佛者其多くは、乾燥無意識的の理法の偏圓優降を配列するに止まり、吾人の感應主たる本尊の體性相等に就て、其研鑽の勞を吝むの傾向あるを見、吾曹は曾て嘆聲を發すること數次なりき、吾曹剪劣固より學佛上未證の点鈔からず、爾かも吾曹が學佛上の所見に依るに、彼の乾燥無意識的の理法を認めて高尚と思へる如きは、未だ佛敎の大綱だに知得せざるの徒と斷言し能ふを奈何せん。

獨逸の碩學ハルトマン氏佛耶兩敎を對比して曰く、佛敎は基礎より造らんとして未だ屋根に達せざるもの、耶蘇敎は屋根より造りて基礎の堅からざるものなりと。彼れハルトマン氏の基礎と云へるは、宗敎の主體たる吾人の本體を指し、屋根とは宗敎の客體たる本尊を云ふなり。其は耶蘇敎は神の方面に關しては、其講明發達進歩せるも、吾人人類の本體を解釋すること、極めて幼稚なるを諷め、佛敎に對しては、吾人の本體を解釋すること巧妙にして、殆ど遺憾なしと雖ども、宗敎の根本義たる本尊の講明極めて淺薄粗漏にして、見るに足るべきものなきを嘲けりたるなり。耶蘇敎のことは且らく措き、我佛敎徒は此評言に對して如何の答辯をか有せる、吾曹は遺憾ながら佛敎徒の大部分は、此評言を甘諾するの

外なきを悲ますんばあらず。

佛敎流傳の歷程を檢するに、戒定慧の三學を骨子として、而して現身に人間已上の證果を獲、或は羅漢に、或は菩薩に、或は佛陀に、到達すること、即ち人間を解脱するを以て修證の行結となすが故に、其戒や、人世の道義を離れて絶待界に傾き、人間としては到底實行し能はざる至難の律法を定め、其定や、殆ど六識の作用を放却せしめんとして、恰も認識を非認するが如きの極端に馳せ、其慧や、絶待不可思議の境界を現身に識得せしめんとして、高さより高きに登り、遠きより遠きに走り、其極宗敎客體の必要を容るゝの餘地を止めず、單に宗教主體の發展にのみ馳せて自己見性を以て教旨と定め、客體を輕視し、同ま客體の本尊を設くるものもあるも、僅かに自己が定慧を催進するの方便に供するに過ぎず。夫れ斯くの如く佛敎流傳の道程に於て、長さ廣き年處に在りて、主體の一面にのみ發展し、定慧の所求する理法の部面にのみ傾きたるが爲めに、佛敎の本質其者が宗教の客體たる本尊を重要視せざるかの觀を呈するに至れり。

佛敎流傳の歷程に在りては、前述の如く長さ廣き年處に於て、本尊を輕視したるの傾向は歴然持ふべからざるも、佛敎本來の組織に就て、銳利なる考察を下さば、佛敎本尊論の指教は、廣く佛敎全體に亘りて、懇切に宣示せられ、而して其が佛敎の根本敎義たりしを發見すべし。

佛敎學上佛敎修行の方法を二大別して、法行信行を立つるは、普く佛學者の承認する所なり。法行と

は一名智慧行と稱し、信行とは詳には信念行と言ふ。智慧行を以て進むもの、爲めには、智慧の所求たる理法を第一要件とし、本尊の感應は是を第二に置き、僅かに正修の行法たる觀智の助縁となすに過ぎず。所謂天台が四種三昧の本尊、四種各別なるが如き、此等は本尊を以て假設的に定むる流儀なるも、智慧行家としては敢て惟むに足らず。然れども信念行に由りて立命せんとするものは、必ずや信念の對境たる本尊を確立し、終始之に賴りて感應を蒙むるを信じ、信念の把住を一に本尊に求むるの外なきなり。故に信念行を以て宗旨となす場合には、本尊の確立は實に最要最重の宗義たるなり。吾曹の眞に信託に堪へざるは、自ら明白に信念行を宗旨となすことを標榜せるものにして、本尊を輕視し、錯亂し、假設的勸誘を増加し、而して之を曲解回護せんが爲めに、或は主體上の説明を混用し、或は觀念家の法語を援引し來りて、幼稚にして且無邪氣なる在俗信徒を瞞了せるもの滔々たり、是れ畢竟積弊の致す所とは言へ、今や東西兩敎自由競争の幕を開きたる我國の宗教界に在りては、國家の爲めにも一大猛省を要する所なり。吾曹は學佛上本尊の體性相を發揮し、佛敎の本質を光顯するにあらずんば、我佛敎界に基礎ある進歩の來る日、斷じて之れ無きを確信せる者なり。聖日蓮は曾て權敎を標準とせる文字の法師及諸經論の言語道斷の文に執する暗禪の法師に就て、佛敎徒の言動の曖昧なるに驚きたりき。其語に曰く、「此七八箇年が前マデハ、諸行永ク往生スベカラズ、善導和尚ノ千中無一ト定ナセ給ヒタル上、選擇ニハ諸行ヲ抛テヨ、行ズル者ハ群賊ト見エタリナンド、放語ヲ申立シガ、又此四五年ノ後ハ、選擇

集ノ如ク人ヲ勸ン者ハ誘法ノ罪ニヨテ、師檀共ニ無間地獄ニ墮ベシト經ニ見エタリト申法門出來シタリ
 ダニ有シヲ、始ニハ念佛者コゾリテ不思議ノ思ヲナス上、念佛ヲ申者可シト墮無間地獄申惡人外道ア
 リナンドノノシリ候シガ、念佛者無間地獄ニ墮ベシト申語ニ智慧ヅキテ、各選擇集ヲ委ク披見スル程ニ
 ダニモ誘法ノ書トヤ見ナシケン、千中無一ノ惡義ヲ留メテ、諸行往生ノ由ヲ毎ニ念佛者立フ之ヲ、驛然
 唯口ニノミニルシテ心ノ中ハ猶本ノ千中無一ノ思也、在家ノ愚人ハ内心ノ誘法ナルヲバ不知、諸行往
 生ノ口ニバカサレテ、念佛者ハ法華經ヲバ誘ゼザリケルヲ、法華經ヲ誘ズル由ヲ聖道門ノ人ノ申サレシハ
 僻事也ト思ヘルニヤ、一向諸行ハ千中無一ト申人ヨリモ、誘法ノ心ハマサリテ候也、無失由人ニ知
 セテ、面モ念佛計ヲ亦弘メントタバカル也、偏ニ天魔ノ計コト也」と又曰ク「殊ニハ建長五年ノ比ヨリ
 今文永七年ニ至ルマデ、此十六七年ノ間、禪宗ト念佛宗トヲ難ズル故ニ、禪宗、念佛宗ノ學者蜂ノ如ク
 起リ雲ノ如ク集ル。是ヲツムル事一言二言ニハ過ギズ、結句ハ天台眞言等ノ學者自宗ノ廢立ヲ習ヒ失ヒ
 我カ心ト佗宗ニ同ジ、在家ノ信ヲナセル事ナレバ、彼ノ邪見ノ宗ヲ扶ケンガ爲ニ、天台、眞言ハ念佛宗
 禪宗ニ等シト料簡シナシテ、日蓮ヲ破スルナリ。此ハ日蓮ヲ破スル様ナレドモ、我ト天台、眞言等ヲ失
 フ者ナルベシ。能能恥ベキ事也」と、吾曹は現今尙、日本佛教徒の曖昧なる言動を繰返しつゝあることの
 如何に多きかと思ふ毎に悲痛を禁する能はず。此等曖昧なる言動は、首として本尊を假設的に説明し、
 漠然乎たる理法を指して、教義の第一位に置き、身法爲本の廣説に安するより來れるなり。吾曹は積

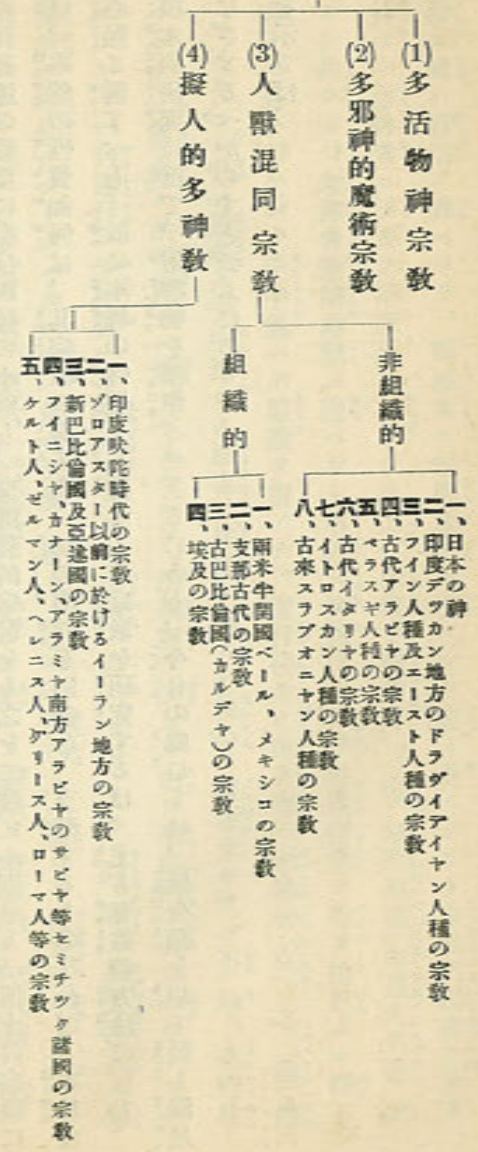
年我教界の學者輩が、本尊を輕視し、曖昧の言動を權にするを悲み、其研究の態度一變せんことを熱
 望したりき。何ぞ圖らん一大警鐘の忽ち佛教學者の耳朵に響き渡るあらんとは。近時佛教已外の進歩せ
 る宗教學者の筆に依りて、宗教の根本的研究は本尊の性質如何を分類比較するを以て、今日迄に顯れた
 る宗教研究中には尤も完全にして、先づ満足を表すべきものたることを道破せられたることは是なり。
 和蘭のライデン大學教授テイール博士は、宗教學上世界有數の學者と稱す。博士は宗教研究に就て、
 本尊の性質を最要條件と定め、世界の各宗教を分類して、自然的、道義的の二種に大別し、次ぎに自然
 的諸宗教を各自發達の程度に従ひ四種に小別し、又道義的宗教をも之を二種に小別せり。博士の宗教に
 關する着眼は、本尊の性質如何は、其宗教に關する一切の事件を制裁し、支配するものなれば、本尊は
 其宗教の中心點と稱すべし。故に本尊の性質を基礎として宗教を研究するは、尤も有益の方法にして、
 則ち宗教の根本的研究に出て、附帶物を標準とせざるにあり、今日の處にては、此分類を以て最も満足
 なるものとなさざるべからずと云ふにあり。

今其類別を示さば、

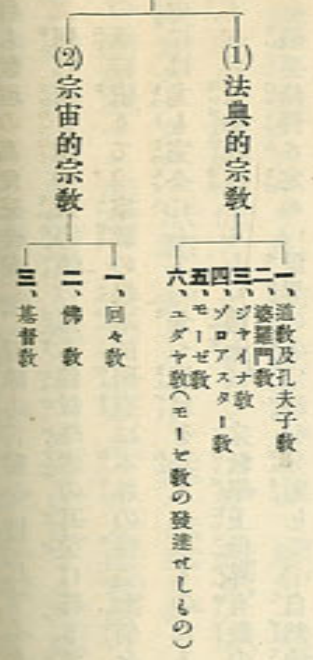
一、自然宗教

二、道義宗教

第一自然
的宗教



第二道義
的宗教



佛教徒は自ら教理の高尙完全を以て誇るものなり、然るに宗教の中心點たる本尊上に就て抱ける其の解釋信念は如何にも茫邈の觀あり、佛敎諸宗本尊を確立するに當り、法身爲本の陋見を懐きたるが爲めに、大智慧、大慈悲ある有意識の佛陀の無始實在を證する能はず。彼の真宗の如き久遠實成の彌陀と稱するも、其は只空言を貪るのみ、彼等が言ふ所の久遠實成無始實在の彌陀とは、其實體法身に歸して、智慧其者の本來固有をば認めず、法藏比丘として四十八願を越世の願と稱して、此本無今有の願力を宗義の最要となし、有始の報佛を本尊となせり。憐むべき彼等は久遠實成と四十八願との、兩立し得ざることすら氣付かざる底の幼稚なる見地に彷徨せり。

聖日蓮の佛敎解釋上に異彩を放てるは、彼の無意識的理法を捉へて、透理の劣法と稱し、法身爲本を評して、學佛徒の原惑となし、而して其本尊上の解説を下すに當りては、諸宗皆本尊に迷へりと標榜して、銳利なる批判を與へ、佛敎解釋法に就て、一大新機軸を發展したるにあり。

近時聖祖の佛敎改革を目して、從來の偶像崇拜を廢して之に代ゆるに經典崇拜を以てしたるものなり。若し夫れ物品にして宗教の爲本となすを得べくんば、經典書籍は尤も貴重のものたらん、爾かも法典的宗教は半開國の宗教たるを脱する能はずと。吾曹は是よりも這般の批判に對し其當否を解決し、尙ほ進んで本尊の體性相に向つて論明を試みんと欲す。

聖日蓮立宗の大綱を案するに、上人は本門の本尊を光顯するを以て最重要の教義とせり。其宗旨の三大秘法と稱するもの、所信の實體は唯一の本尊に結歸す。則ち本門の戒壇は本尊安置の處に名け、戒體は本尊の本體たる妙法蓮華經に外ならず、之を信受し念持して欠失せざるを以て戒法となせり。而して其本門の題目と稱するもの、是れ亦吾人行者の信念上に把住し憶念して、忘却すべからざるを指したるものにして、其把住せられ憶念せらるべき法體は、則ち本尊の本體たる妙法に在り。故に宗祖日蓮は顯佛記に記して『本門の本尊、妙法蓮華經の五字を以て闍浮提に廣宣流布せしめんか』と教へ、開祖日什師は『法華經一部は大曼陀羅を解説したるもの』と認め、而して吾人の受持する題目は是れ則ち本尊の本體なりと説けり。

夫れ斯くの如く、妙法蓮華經は法華經と云へる法典の題目にあらずして、法界本有（實在）の本尊なり法華經と云へる法典は、能く此法界本有の本尊を顯示し、説明したるが故に、題して妙法蓮華經と名けたるなり。語を換へて之を語らば、吾人の尊信すべき對境を説明したるものを法華經と名づけ、吾人の信念は何物に對して發すべきか、那邊に向つて依止せしむべきか、如何に信念を把住すべき歟、如何に信念を安立すべき歟を説きたるものに外ならず。故に聖日蓮の闍浮提の人に授與する妙法蓮華經は、法典の名にあらずして法典所顯の實體にあり。古來宗學上に能詮の教と所詮の體とを分ち、妙法蓮華經は一經の名にはあらず、所詮なり體なりと説けり。是れ日蓮已後の學者に依りて附加せられたる説明にあらず、日蓮自ら全力を此解説に注ぎたるなり。日蓮は天台家において聲色の近名を尋ねて無相の極理に到ると云へる解説を卑しとなし、自ら唱道する所は名體不二の妙法にあり、妙法を以て名とし、體をして分離せしむるの謬見を痛論せり、上人は一箇の好き警諭を示せり。『猿を離れて肝を求むる勿れ』と。

上人の教ふる妙法は、實體を包有せることを信知せしむるにありき。天台家すら法華の題名を釋して本地甚深の奥藏と云ひ、序王とは經の玄意を述すと云へり。是れ他なし、妙法蓮華經は經名にあらずして法界の實相を指せるなり、宇宙の實體なり、本有の本尊なり、釋迦大聖の之を開示顯説したる法語を集めて法華經と名づけたり。法華經一部は大曼陀羅の説明なり、日蓮上人は之を世に紹介せんとして、闍浮統一の大本尊を圖顯す。然るに學者往々妙法蓮華經の語に迷ひ、題目の名に誤らる、實に上人の宗義を學ばんとするもの、一大注意を要する所なり。

聖日蓮の唱道したる本門の本尊たる、其意義高遠にして、其注意周足せり。近時の宗教學者の如き、基督教を中心として他の宗教を配列比較せんとする人々には、到底會得せられざるなり。聖日蓮の宗教改革を目して、彼の偶像の崇拜を破して法典の崇拜を教へたりとの評語の如き、其當らざる眞に盲人撫象の類のみ。見よ上人の遺文を、見よ何れの所にか偶像と經典とを對比して、其破立を論明したること

ありや、彼等は恐らくは、上人が法佛の比較を論じて諸佛所師所謂法也との意義に依りて、權教の一佛一菩薩等を分裂的支體的に崇拜するの非を指摘し、法の上に統一あるを知らしめんとせる聖語を誤解したるものならん。果して然らば、此は偶像を破して法典を立つるにあらで、多神分裂の非を攻撃し、統一的の本尊に向はしめんとするものにして、何れも本尊の實體は活ける佛菩薩を指して、之を法體則ち宇宙不變の妙法の上に統一せんとするものなれば、偶像崇拜、法典崇拜など云へる分類語を用ひて、評論せらるべきにあらず、是畢竟基督教を最高等の宗教と誤認せる僻見より來れるに外ならず。實に聖祖光顯の大本尊は彼等が會得の外にあるなり、請ふらくは、僞慢なる評語を止めて恭順なる思念に住し闊浮統一の大本尊を讚仰し見よ。如來は一切衆生の大施主なり、自然の智慧、如來の智慧は、吝惜なく衆等が本有の心田に降り來らんなり。

聖日蓮の光顯したる本尊の眞價を知らんと欲せば、先づ其本尊の本體と、性質と、相狀とに就て、研鑽の勞を拂はずんばあらず、其一に論述せるが如く、佛教流傳の歷程にありては、宗教主體の方面に偏して、客體本尊の講究粗漏たりしこと掩ふべからず、斯くの如き佛教史上に於て、屹然として宗教建設の全力を、本尊の方面に注ぎたるの一事、既に已に上人が宗教の超凡なるを認識せずんばあらず。

佛教は諸佛諸天の本事因縁を散説し、法語神呪の効驗利益を漫示したる教法の如く見ゆるなり。故に諸佛諸天の間に脈絡統一を發見するなく、法語神呪の根本主義を討究せずんば、多端分岐の信念對境を生じ、遂に支離滅裂の教法として、其効果を亡滅し去るは理の晴易きを覺ゆるなり。然るに諸宗の宗師此間の考察を費すに當り、單に法身爲本の迷見に坐して、其已上銳利なる研鑽を積むなかりし跡あるは聖日蓮の極めて遺憾となす所なり。又聖祖は佛教解釋の一要義として、一技一派の分裂的解説と、如來一代藏經の統一的妙旨と、二者相分る、所以を講明し、決然として數千卷の經典と、三國傳法の論師との上に向つて、一大解決を試み、紛々擾々たる佛教學上の異説を、先づ此二大論派に大別し、而して區々煩瑣なる教説を蔑視し、短刀直入諸經諸宗の本尊上に對して、其内包の廣狹、其外貌の整否を検討し明晰なる論斷を下せり。恰も單騎陣營を突き、敵將の首級を掲げ來るの概あり。

聖祖は諸佛諸天の脈絡關係を本法の上よりも統一あるを認め、又本佛の上よりも統一あるを認め、又復吾人の本體の上よりも統一あるべきを認め、斯くして法界の眞實相を討究探尋し來るに、何れの方面よりするも、宗教客體は、唯一絶待の境に登らざるべからざるを確認し、先づ本尊の外貌に於て周足圓滿を主張し、内包に就て多神統一、法佛不二、生佛一體、輪圓具足の妙旨を發揮せり。

故に聖祖の本尊を信知せんとせば、法の方面よりし、佛の方面よりし、又吾人本體の方面よりして之を窺ひ、而して次に三者の關係を討ね、進んで最終の安心歸着のある所、則ち吾人信念の把住は何れにありやを了せずんばあらず。

我宗、中古已來の學説を見るに、前記三者の關係に就て適當の案配調整を誤まるもの多く、隨て最終

信念の把住をして、聖祖の本志に反せしむるの迷見に陥りたるもの滔々として各派の間に瀰漫せり。吾曹不肖、固より聖祖光顯の本尊に就て講説の力あるものにあざれども平素聖訓を拜讀するの傍ら、聊か領會する所なきにあらざれば、所見の一斑を掲げて大方君子の高教を仰がんと欲す。

第一本法の方面よりせる統一的本尊の意義たるや、法を以て諸佛所證の境とし、諸佛證悟の依止とし、諸佛所行の師とし、諸佛は法あるが故に佛道に入り、法あるが故に行法するを得、法あるが故に證悟するを得たり。而して法に二なく、別なし、故に唯一の大法によりて證悟したる佛陀は、同一の妙智を控らし、同一の力用を示現するを得べく、又誓願慈悲に於ても、法の泉源を同くするが故に、法の上より見來れば、一軌に歸して佛々契合し、諸佛の間に別行別願を主張するものは、皆假設的説明に過ぎざるを知るべく、法に對すれば諸佛は皆子なり、母を敬すれば其子皆喜ぶが如く、法を信念の對境とすれば諸佛皆護念を垂る。豈一佛一菩薩を偏賴し、偏崇を傾くるの愚をなさんや。諸天も亦法の爲めの故に其力を得るもの、法は諸佛諸天の統一の中心なり、佛三種の身は方等より生ず、諸佛所師所謂法なり、諸佛本誓願、我所得佛道、普欲令衆生、亦同得斯道、諸天晝夜、常爲法故、而衛護之、諸佛如來法皆如是と、釋迦文の教ゆる所豈痴疑を加へんや。若し此の如く、法其者を以て統一の中心たるを了せんか、宜しく此の中心の法に向つて、銳意講究の勞を取るべし。諸經諸宗は分裂的の主義より出て、一佛一菩薩の本尊因縁に拘泥せるもの、若しくは己々たる法語神呪に依り頼めるもの、豈能く統一の大法を知らんや

其れ統一の大法とは何ぞ、本有不改の實相に外ならず、實相とは何ぞ、眞如の理體にあらず、六大の事にあらす、則ち無始無終に法界に實在せる、十界三千の妙法とは如何なるものぞ、法本尊の本體實に此に在り、下去て之を説かん。

其 三

今や論明の順序として法本尊の本體を説述すべき機會に到達せり。茲に法本尊の解釋を試むるに先ち學佛者の注意を請はざるべからざるものあり、其は佛教上、法佛の關係を説くに當りて用ゆる法の字は如何なる意義を含めるかの一事是なりとす。佛教上に應用せられある法の字を検するに、法理と云ひ、法體と云ひ、法身と云ひ、行法と云ひ、其他諸種の意味に於て、尤も廣く應用せられあるなり。而して法佛相ひ對する場合の法とは、果して其何れを意味せるにや、乃ち法理と佛智との關係を指すにあるか將た又法體と佛體との關係を論ずるにあるか、此般の着眼最も分明なるを要す。

聖祖日蓮が法の方面より宗教客體の統一を見たるは、佛智も佛體も、皆法體中の存在に外ならざるを認め、而して法理と云ひ行法と云へるも、亦た是れ法體に包含せられ、法體より發動せるに過ぎずと教ゆるにあり。

されば聖祖唱導の法本尊は、無始無終無邊無際の間存在せる實相の全體にして、其實相全體の關係

の妙作用を信念するにあり、實相の全體とは一相無相にあらず、三千の諸法宛然として實在せるを意味し、之れを名けて三千事常住の法と云ひ、稱歎して妙法と云ふ。實相全體の關係に於ける妙作用とは何ぞ、他なし、迷悟苦樂の二者、永く分離すべからざるのみならず、迷者は苦より苦に陥らんとするも、悟者は能く之を悲愍し、日夕救濟の手を垂れ、暫らくも拋棄し玉はざるなり。語を換へて言はゞ、宇宙法界の實相は、迷悟十界の共存せる一大社會に外ならず、此の大社會は何人の構造せしものにもあらざれば、又一相無相の理體より發生し來れるにもあらず、十界三千の諸法宛然として無始已來共存せるなり。此共存者相互の關係は、無始無終に分離するを得ず、迷者は迷見の爲めに分離し得らるゝものと思ひ、差別愛憎の巷に彷徨し、自利損他の陋態に陥れり。而かれども悟者は常に此の迷見と戦ふべく、大慈悲の發動を試み始めなく終りなく迷悟相離るべからず、恰も父子の慈愛天性より出て、終に易ゆべからざるに似たり。斯くの如く宇宙法界の實相は、尤も趣味あり尤も温き同情者の共存社會なり、故に實相の全體と其關係とを想起せんか、自己の迷見を耻づると同時に、悟者の温情慈愛に感奮するに至る。斯かる思想信念の對境として法本尊は顯はれたるなり。

聖祖が「十界ノ依正即妙法蓮華之當體也」(内廿三)と言ひ、「日本ノ二字ニ六十六國ノ人畜財ヲ攝盡シテ一モ殘サズ」(内十六)と言ひ、又「妙法ノ曼陀羅ハ一切衆生成佛得道ノ導師也」(内廿八)と説く。此等は本尊の本體たる妙法は正しく實相の全體を掲げて、而して其實相固有の妙作用を信念せしめんとし

たるにありや明なり。此等の祖判は能く實相の全體と其妙作用とに就て、周足なる意義を示し玉へり。此外妙法海中の一局一部面を散説したるの祖判甚だ多し、彼の「三會八年ノ間ノ佛語、之ヲ擧ゲテ妙法蓮華經ト題ス」(内五十六)と云ふが如き場合には、法華經一部を妙法中に包含せるを教へ、又「八萬寶藏十二部經ノ眼目」(内十六)と云ふの場合には、一切經を以て妙法の所攝となしたり、此等は法語神呪に對する信念を總括したるなり。又彼の「唯南無妙法蓮華經ト唱ヘテ解義ノ功德ヲ具スルヤ」(内十六)と説き、若しくは「六度萬行ヲ具足スルヤウチキカン」(内二)と云ふの類は、行法上に於ける總括を示したるにあり。此等一局一部面の解説に就て、學者任々其一を取て其他を排す、豈局見たるを免かれ得んや。宜しく妙法の召す所、含む所の意、深遠幽玄なるを認め、尤も周足圓滿の見地に到達せんことを期せずんばあらず。

猶聖祖の法本尊を窺はんとするに於て、一大注意を重ねざるべからざるものあり、其法體を討究して遂に實相無相の迷見に墜落し去るの弊あること是なり。此は人本尊上に起る法身爲本の迷見と、其方面を異にするも其迷源を一にせり。

「無量義經」に「無量義者從一法生」と云へるは、釋迦牟尼が四十餘年間散説したる法理、法體、行法の、其何れをも綜合し來りて、其統一の中心を根本法の上に取らしめんとせるは、明白にして執見なきもの、均しく認むる所なり。「無量義」の語は、其包括する所廣けれど、而かも分明なり。惜

ひ哉、其統一の中心たるべき根本法其者の説明、未だ完結を告げず、其「一法作者即無相也」と説きて
實相を三千建立の方面に嚮はしむる能はず、却て一相無相の側に押し込みたるは、蓋し此經の缺點にし
て、法華經王の前驅として甘んぜざるべからざる所以なり。斯の如き一相無相を指して實相となさんか
斯かる法體は僅に觀智の對境としては香味せらるを得んも、信念の對境としては其功用を失ひ、無味乾
燥の宗教客體として遂に滅びんのみ。聖祖、無量義經を論じて曰く、「無量義經にて實義とをばしき事
一言ありしかども、いまだまことなし、譬へば月の出んとして其體東山にかくれて、光西山に及べども
諸人月體を見ざるが如し」(内目抄)と、其語優にして能く其實を寫せり、其體東山にかくれと云へるは實
相の説明未だ盡さず、三千建立の妙旨に至らざるを指すなり。故に聖祖は法華經の迹門を評して、曰く
「法華經方便品の略開三顯一の時、佛略して一念三千心中の本懷を宣べ給ふ、始の事なれば、時鳥の音
をねをひれたる者の一音きゝたるがやうに、月の山の半に出たれども薄雲の掩へるが如く、かそかなり」
(内目抄)と、是れ他なし方便品に於て諸法實相所謂諸法と説きて、實相の説明無量義經よりは一段分明た
るも、未だ十界三千事常住の法體を露出するに至らず、故に薄雲の掩へるに比す。而して聖祖は壽量品
の過去常顯はれ、釋迦の無始本佛たること分明したるを指して、之を實相法體の全體顯現となし、恰も
月輪天中に登り、四隅を光被するに譬ふ。若し本佛の實在顯はれずんば、十界常住の實相顯はるるなく
隨て妙法の法體其實を失ひ只空言に歸せん、法體の存亡は一に本佛の實在と否とに懸れり。

日蓮教學講座

(第二十回)

文學士 河 合 陟 明

第二章 日蓮聖人の君國に對する感激と報恩 (續)

★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★

風大なれば波大なり龍大なれば雨猛き様に彌々仇を爲し益々憎みて御評定に僉
議あり、頸を刎ぬべきか鎌倉を逐はるべきか弟子檀那等をば所領あらん者は所
領を召して頸を切れ或は牢にて責め或は遠流すべし等云云。日蓮悦んで云く、
本より存知の旨なり、雪山童子は半偈の爲に身を投げ、常啼菩薩は身を賣り、
善財童子は火に入り、樂法梵志は皮を剝ぐ、藥王菩薩は臂を焼く、不輕菩薩は
杖木を蒙り、師子尊者は頸を刎ねられ、提婆菩薩は外道に殺さる。此等は如何
なりける時ぞやと勸うれば、天台大師は時に適ふのみと書かれ、章安大師は取
捨宜しきを得て一向にすべからずと記さる。法華經は一法なれども機に隨ひ時
に依りて其行萬差なるべし。
(種種御振舞御書)

★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★

然るに幕府はこの警告に接するも何等施すべき策
を知らず、在萬歲を閲し、況んや諸宗僧侶に至つて
は日蓮が博識と強義とを知つて怖氣を振ひ、公場對

決はをろか却つて誹詐奸佞譏誚中傷至らざるなく、
殊に陰然として幕府に權力を振ひ居る權女房、尼御
前たちに取りつきて、要路の者共を動かし、遂に日

連が頭を刎ねよといふまでに立至り、聖人が身邊は一刻危険に迫つて来た。聖人この事情を知るや知らずや、否心眼すでにこれを看破しつゝ、然もたゞ己が一身に非で刻々一國に迫り来る大國難を感知しては、國士の衷情豈憂如たるを得やうぞ、またも書を當時非常の権力者たる平ノ左衛門尉頼綱に送りて方今世々悉く關東に歸し人皆土風を貴ぶ、就中日連生を此土に得たり豈吾が國を思はざらんや……而るに近年の間多日の程大戎浪を亂し夷敵國を窺ふ、先年勅へ申す所近日符合せしむる者なり、彼の太公が殷の國に入りしは西伯の禮に依り、張良が秦の朝を量りしは漢王の誠を感ずればなり、是れ皆時に當つて賞を得たり、謀を帷帳の中に回らして勝を千里の外に決せる者なり、去れ末萌を知る者は六正の聖臣なり、法華を弘むる者は諸佛の使者なり、而るに日蓮悉くも鷲嶺鷄林の文（佛陀の經典）を聞いて鷲王鳥瑟の志（佛陀の雅稱）

幕府自ら作りし貞永式目を破りて、相州片瀧龍ノ口の刑場に頸刎ねんとした。

聖人はいでや此時こそ身命を法華經に捧げて大法の恩に報じ、もう古聖先賢の跡を慕うて我も亦殉教の芳躰に列し、この捨身供養によつてこそ佛道修行の目的たる成佛得脱の大果報を得て、先づ父母を救ひ弟子檀那を救ひ法敵をも救ひ、否々——國恩に報ぜん——國恩に報ぜん——と深く念願されたのであつた。「身命に勝る惜しき物なければ身命を布施として佛法を習へば必ず佛と成る」「臭き頭を法華經に捧げて金色の如來と成るは、砂を以て黄金に替へ糞を米にあきなへるが如し」一期の所願をさしく今ぞ成就せん……

警固の武士三百餘人夜陰の篝火々々としてつらなる中を蕭々として由井の濱邊を打過ぎていよ／＼刑場龍ノ口に着く、隨ひ來りし誠忠無比の四條金吾兄弟四人は、切腹してお供つかまつらんと悲壯健氣な

を覺り、利へ將來を勸へたるに相符合することを得たり、先哲には及ばずと雖も定めて後人には希なる可き者なり、法を知り國を思ふの志尤も貴せらるべきの處、邪法邪教の輩譏奏諷言するの間久しく大忠を懐いて未だ微望を達せず……抑も貴邊は當時天下の棟梁なり、何ぞ國中の良材を損せんや、早く賢慮を回らして須く異敵を退くべし世を安んじ國を安んずるを忠と爲し孝と爲す、是れ偏へに身の爲めに之を述べず、君の爲め佛の爲め神の爲め、一切衆生の爲めに言上せしむる所なり。

然るに見よ、この憂國慨世の大偉人が憂憤忡々の情抑へんとして抑ゆる能はず、祖國の危急を目前に見て再び國家を諫曉したるに、この日幕府は既に日蓮が頭を刎ねべく決しむると見え、頼綱自ら三百の兵を率ゐて松葉ヶ谷の草庵を襲ひ、聖人を裸馬に乗せて鎌倉八ヶ谷八ヶ郷を引き廻し、遂に夜に入つて

る決心を定めしことながら、さすがに今ぞ師の御最後ぞと思へば胸張り裂くる思ひして思はず涙に掻き暮れ泣く、「こゝにてぞあらんすらんと思ひし處に案の如くつはものども打まはりて有りしかば、左衛門ノ尉（四條金吾）申す様只今也と泣く、日蓮申す様、不覺の殿原哉、是程の悦びをば笑へかし、何に約束をば違へらるゝぞと申せし時」あゝ生死を超脱したる聖者の一語、凜として聲あり、不滅の力あり……端坐合掌肅然たる聖者の威容——萬物寂として聲なし……太刀取江智ノ三郎直重がうば玉の間にもしるき刀身に冷かなる水をそゞぎて振り上げし名劍蛇胆丸、あはや紫電一閃とぞ見えしその時しも、俄然、霹靂雷電天地震動し疾風沙塵を吹きまくり怒濤澎湃刑場に打ちあげ、「江ノ島の方より月の如くなる光物鞠の様に辰巳の方より戌亥の方へ光り渡る十二日の夜のあけくれ（味爽）に人の面も見えざりしが、物の光り月夜の様に人の面も皆見ゆ、太刀

取目くらみ倒れ臥し、つはものどもおち捕れて一町
計り馳りのき、或は馬より下りて畏り、或は馬の上
にてうすくまる者もあり、日蓮申す様、何に殿原、
かゝる大禍ある召人をば遠のくぞ、近く打寄れや打
寄れやと高々と喚はれども急ぎ寄る人もなし、さて
夜も明けしかば、いかに頸切るべくば急いで切るべ
し夜明けなば見苦しかりなんと勸めしかども兎角の
返事もなし、あゝ神色自若として泰然たる雄姿……
眞乎 大丈夫なる哉

かくて天地を威格せしめたる聖者の頭は遂に斬る
事を得ず、漸く佐渡にまたも流罪することゝなつた。
こゝに於てか聖人は、法華經に豫言せられたる末法
の『法華經の行者』の受くべき法難迫害を——いは
ゆる「勤持品の二十行の偈」なる、怨疾罵詈杖瓦
石、數々擲出せられて流罪死罪に及ばんといふその
法難忍受の豫言の事實を悉く身に讀み得たること
を思ひて、一種沈痛無限否名狀すべからざる法世に

の大海、その靈境その風光は——これぞ開目録で
あり觀心本尊鈔であります。これ實に日蓮聖人第一
の遺書にして教學の精粹かゝつて此に在り、三國(印
度、支那、日本)二千年の佛教史上前賢未發の大議
論たり、これ誠の日蓮が胸中に鬱物として懷抱せり
し所、多年公場對決の機を待ち居て、時來りなば一
擧にして法の邪正を決し、以て衆生の心眼を開かし
め、その現當無限の行先を救はん、然り又實にこの
神聖なる教を以てこの尊き國家を護らんと一片耿耿
の赤心もてその機を待ちしも、遂に空しく今やこの
佐渡極寒の雪中に、熱烈火を吹く墨痕淋漓たる大文
字となつて進出し出でた、否これ肉日蓮はもはや既
にかの龍ノ口法難に死しをばり、今や靈上行がその
久遠の靈界より澎湃として傳へ來りし本佛直受不滅
の梵音である！

その他重要な論述あまた此の寒苦忍難の中に、
法敵四周に群る中に在つて綴られたのである。而て

打涵りながら、まさに豫言せられたる聖者上行菩薩
たるの大自覺を抱きつゝ、こゝに住むに家なき雪中の塚
原三昧堂に——「塚原と申す山野の中に、洛陽の連
台野のやうに死人を捨つる所に一間四面なる堂の、
上は板間あはず四壁はあばらに雪ふり積りて消ゆる
事なし、かゝる所に敷皮打ちしき簀うち着て夜をあ
かし日をくらす、夜は雪電雷電ひまなし、晝は日の
光もさゝせ給はず、心細かるべきすまゐなり、北國
の習なれば北山の巔の山をろしのはげしき風身にし
む事をばたゞ思ひやらせ給へ」この雪風吹き荒ぶ草
堂に、かの伊豆流罪の時不思議に感得せしよりこの
かた寸時も身を離さざる本尊釋迦佛の立像をまつり
至心これに事へまつりつゝ、いでや「頸切らるゝな
らば日蓮が不思議をとゞめん」と、氷る筆を息吹き
に温めつゝ骨を削り血を絞りて未だ明さゞりし一期
畢生の大主張を書き上げた、筆下聲あり賑々として
紙上に躍る——天地を包みても尙餘りある上行菩薩

聖人が佐渡に渡つてより、かの先に承久の逆亂によ
つて逆賊義時泰時のために、あはれ痛ましくもこの
地に流されたまひ悲憤の涙を絞りつゝ終生出づべか
らざる島守として遂に此地に相果てたまひし順徳上
皇に、最後までお仕へして今はその墓守をしてゐた
無二の忠臣遠藤爲盛が、初め念佛の信者でひそかに
聖人を斬り殺さんとして隙を窺つたのであるが、諄
々として聖人よりその一王一佛の大義名分を聞かさ
れ、又聖人のその儼然たるはた温乎たる態度風采を
見、その一種無限の靈光に打たれて忽ち聖人に歸伏
し、その後在島四年の間妻と共に人目を憚つて雪中
夜な／＼聖人に食を運び參らせた事蹟に至つては、
あゝまことに國士と忠臣と——北海波荒く風寒き寒
外の孤島に、げに感慨深き情景ではありませんか。
聖人は爲盛に阿佛房と名け、その妻には三ヶ年食を
供養し呉れし厚き志と御恩とを稱へて千日尼と名け
られ、後にこの事を追憶してはこの尼に「而るに日

連佐渡の國へ流されたりしかば、彼の國の守護等は國主の御計ひに随つて日蓮をあだむ、萬民は其の命に随ふ、いかにも命助かるべきやうはなかりしに、天の御計ひはさてをきぬ、地頭々々等念佛者々々等日蓮が室に晝夜に立ちそいて、通ふ人もあるをまどわさんとせめしに、阿佛房に額を香負はせ夜中に度々御わたりありし事いつの世にか忘らむ、只父母の佐渡の國に生れかわりて有るか」と誠に肺腑に迫る感激の手紙を送られてをるのであります。

生きては返すまじまた返るまじ此の佐渡ヶ島に降り積る雪をも「如來衣もて覆ひ給ふとはねんごろの義なり」と見たる不撓不屈の眞佛子は、いよ／＼上行菩薩の自覺を深めつゝ、「日蓮は日本第一の法華經の行者也」と聲高らかに叫んで一期の主張を書きとゞめながら、國情日に非なるを察知して憂憤禁ぜざりしその時、遂に幕府は聖人に赦免狀を發するに至つた。かくて聖人は鎌倉に歸るや四月八日三度び幕府

に至りて、執權時宗、内管領頼綱等に對し、侃々諤々諫言せられた。その論旨は何ぞや、第一に勤王論であり、佛法の正邪である。「汝北條は、かの義時ばらが臣下の分際を以て天皇を廢し三上皇を遠島に奉り二皇子をも流し公卿をも悉く首斬り、我國思想の根本を滅却した、しかもその罪を未だに悔ひず、下に民心を欺いて多少の恩惠を賣り、上に朝廷の威徳大權を抑へて恬然として改めず、これ何事ぞ人民も亦暗愚にして食らはすに少しく利を以てすれば靡然として隨ひ、北條が上に如何なる大逆を犯しあるかをも知らず、悉く懷柔せられをばり、又實に諸宗僧侶共が一旦朝廷の敗れたまふや、忽ち關東に落下りて權勢に阿附し、北條一門の武運長久を祈るに至つては言語道斷なり、かくも國民が上下もろとも大義名分を忘れ果て、朝威を疎かにするとは許すべからざる事なり、故北條！先づ自ら爲し居る所の大逆不道の行爲を改めよ、先づ日本國の思想界を正

して尊王の大義を確立せよ。佛法の方に於ては速かに邪法邪宗を誡めて釋尊の教の正義正道を發揮せよ釋迦牟尼如來はたゞに佛敎を開かれし佛なるのみかは久遠根本の大恩教主なり、大濟度者なり、本佛釋尊は一切衆生の靈的主君なり、然るに釋迦如來を蔑にして彌陀大日等の他土他佛に走るは自國に存して他國の王に通ずる如く、佛法界の亂臣賊子なり、速かに謗法の諸宗を禁じて法華の正法を確立せよ、宗敎は人心に最も強き影響を與ふ、宗敎にして誤らば人心亂れ、將又國家政道の亂るゝは必然の勢なり、見よ、今や蒙古の襲來近きにあり、宜しく王法佛法の大義正道を尊して、民心を正しうし國家を改造し以て我國本來の姿に還し、内は國民精神を鍛へあげ、外は彼の蠻族に備へよ。夫れ教法は國家の魂魄なり、けだし國家は國民によつて維持せられ、國民の精神は敎によつて維持せらる、即ち國には人心を指導する所の敎なかるべからず、民心の根柢を培養する一

大徳敎なかるべからず、汝等何ぞ速かに一佛一王の大義名分敎を以て今非常の國難に備へ、之を國家の守りとし、之を國家の本尊とし、之を以て國家を祈願せざる。苟くも國家を救はんにはまづ名敎を打立て、思想上より民心を鍛へ、これと同時にこの正法の威力に依つて神明佛陀の感應守護を受くるに足るべき清き信仰を君民ともに把住し鼓吹せざるべからず、我が立正安國論の眞精神實に此に在り。聞けや正法正義の國ならんには諸天善神これを擁護す、邪法邪義の國ならんには天神地祇豈に怒りを爲さざらんや……」

頼綱この度は禮を厚うして迎へ且つ懇懇に問ふ「蒙古は何時來り候べきや」聖人答へて言ふ「經文には何時とは見えて候はねども、天の御氣色怒少からず急に見えて候よも今年は過ぎ候はじ」満座の鎌倉武士色を失ひしや否や。しかも彼れ北條は遂に聖人の諫言に耳を藉さず、自ら大義名分に悖れるを遂

に直すなく依然として政權兵馬の權を壟斷して天皇統治統帥の大權を干犯し日本國家を安泰にすべき將又蒙古の來襲に備ふべき所以を知らず、而て又精神界にはもろくの邪信迷信を正して一大明教を發揮することをなさず——諸君、近年我が國の政治家には又この亞流なかりしや否や、否、時の古今洋の東西を問はず、名分を蔑にして權勢と利慾に給み、人民の眼をかすめ其の心を欺く者決して少々に非ず——しかも北條は日蓮に對しても亦食らはすに利を以てし、莊田千町を以て堂宇を建立し、以て國家安泰の祈願を爲さしめんとした、否今や幕府はむしろ聖人に妥協を申し込み、たゞ諸宗の折伏だけは止めて貰ひたい、柔かに法華經を弘めて呉れ、その代り莊田千町を以て云々」と頼み來たるに至つた。然しながらもとより高風清節の大丈夫兒、何ぞかくの如きの甘言に耳を傾けようぞ、もとこれ廉潔の義人、その念する所はたゞ王佛一乘（一道）の大義のみ、

そのも、聖人が佐渡より歸つて三度び御王護國の大義を高唱し、遂に聽かれずして莊田千町何かあらんと、北條の愚を嘲笑つたきり一切布教せずして甲斐の山中に入りしはこれ何の故ぞ。三度び諫めて用ゐられず、身退くは古の道なりと言はれしは、これ彼の伯夷、叔齊の故事を學んでの事である。聖人は出家沙門なればとて、決して佛敎のみに私し、また佛敎の高僧偉人のみを學ばれたのではない、日本も支那も印度も、古來のあらゆる聖賢英豪忠臣義人を慕はれてゐるのである、それに倣はれてゐるのである。身延山といふは、彼の聖の清なる二君子が周粟を食らふに忍びずと稱して西山に隠れしその西山に擬せられたのであつて、聖人もまた藪を食ふべき覺悟を以て入山せられたのであります。しばしば北條を諫めたれども遂に諫を肯かぬ、これを討倒して取つて代るといふは、出家沙門の身として爲すべきことにあらず、今は時を待つより外に道はなしと、諫言を

その存する所はたゞ國を思ひ人を愛するの精神のみ「然るに今日蓮が唱ふる所の、法を正しうして國家を救はんといふ大道正義の理に聽かずして、食らはすに利を以てせんとするとは咄何事ぞ、この膝一たび屈せばまた起つ能はず、汝北條は武士にも似合はぬ、我れ日蓮に諫へるものか、我が言を聽かずして我に阿るとは我を侮辱するものぞ！」峻嚴犯すべからず、蓮を蹴つて立つ。しかも聖人が心中は如何なりしぞ、あゝ時運非なるかな屑々たる鎌府の俗吏彼れ北條の、いづくんど我が大誓願を解するものならんや、聖人が滿腔の熱血に燃ゆる救國濟民の大志願は、遂に暢達するに由なくして、痛憤悲歌惜く能はず、慘然去つて白雲深き身延の山中に入り、遂かに知己を千載の下に待つて、賢王聖主の世を囑望せられたのでありまするか、知るこの退隱の裏面には盡きざる悲憤を包み滅びざる理想の勃發を抑へられたるものなりしことを——。

北條に打込みおきて、今にも蒙古の來襲あり、かたがたして覺むる時もあらんかと、遂に悲憤の涙を吞んで白雲の郷に入る。あゝ、聖人が一代の奮闘、事志と違ひ、時非にして志願成辦の笑を洩らすを得られざりしか。然しながら幕府も今はすでに、殊に時宗はさすがに聖人の大人物なるに感じて痛く尊敬し、斡旋して京都の朝廷に請うて「宗門弘通の醜狀」なるものを聖人に致せしことであるゆゑ、頃年數多眞法の威力、御威尤も深し、三國に比類無き妙宗、後代有り難き尊僧、何れの宗か之に比せん、日本國中に於て宗弘のこと妨げ有る可からざる者也、仍つて執達件の如し。

文永十一年正月二日 城左兵衛奉
日蓮上人

これよりは公然と安心して人を集めて布教し得るのであるにも拘らず、今はこの擧に出でずして枚を衝んで甲斐の山中に入りしといふは何故であるか、こ

これが實に日蓮聖人の偉大なる所であります。けだし宗教は固より一人一人を感化するといふことも目的ではあるが、日蓮聖人の大理想は、この宗教を一人一個の爲に立つる宗教として考へられてをらぬ、日本國家の爲に打立てる宗教といふことが、その大目的である。無論國家も宗教も人を捨てるものではないが、由來國家は正義の團結といふものに依つて進み行くべきものであるから、國家の團結なるものが弱つてしまへば國民の利益幸福といふものは無いのである。宗教も亦やはりその國家的團結生活に力あらしむる主旨を取つてゆくのであるゆゑ、一人二人の信者ができるで済むの問題ではなく、どうしても一國の思想界を覺醒して無上の正法を國家に捧げ、而して國運の發展を期し、據つて以て個々の幸福と安住とを得せしめよう、王法佛法に冥し、佛法王法に合して、かくて相扶けて以て日本を室々たる國家にせなければならぬ。これを法國冥合の理想といひ、

これを具體的に實現して本門戒壇（一國舉つて正法を受戒するの壇場となす）といふのであります。かくの如き遠大なる考を以て三度びまでも極諫し、遂に容れられずして退かれたのである。こゝに聖人の大いなる苦衷は存し、其愛國愛法の至情は脈々として我等の靈奥に無限の響を傳へてゐるのであります。今日以後と雖もやはり勢力に阿附せず正義を履んで進む者がなくてはならぬ。たゞ一時の成功のみ焦りかうもせんあゝもせんとも目前の利害成敗に依つて動く者のみ多くしてはすこぶる憂慮に堪へぬ。たとひ己の信する主張は當代に容れられずとも、當代を超越して而て後世の議を爲し、一時は人打ち張り憎まんととも、その主張その正義なるものは後代にまで光輝を放ちて、永遠に國家の爲になり人類を裨益するといふだけの先見を以て「教」といふものは立てられなければならぬのである。（續）

南無妙法蓮華經

法華經講話

（第二十一講）

小林 一郎

妙法蓮華經方便品第二（其五）

この間は方便品の、佛様が世の中に御出現になつたのは一大事の因縁を以て出られたのだといふところを読んで居りました。

一大事といふことは前にも申したやうに、人間の日常の生活等に於て根本的の一番大事なことといふ意味です。何が根本的に一番大事かといへば、人間は生きて居るのであるから、何しに生きて居るかといふことを知るの、それが一番大事なことである。何しに生きて居るか解らないで生きて居るのは、まるで生きるのぢやない、生きる眞似をして居るやう

なものですから、これでは洵につまらない。それは世の中に居りますれば、仕事があるとか、或は地位を得たいとか、身分が高くなりたいとか、名前が欲しいとか、位が欲しいとか、いろ／＼のことがありませう、けれどもさういふことよりも、もつと根本に於て、「一體生きる」といふのは何のために生きるのだ」といふこと、それがシツカリと捉まつて居なければ、餘の事は何か土臺が定まらないやうなものです、根の無い枝か葉見たいなもので、さう長く續くものではない、そこでその「一大事」人間は世の中に生きて居るのだから、その生きて居ることの本當の意味を知らせたい、何しに人間といふものが

茲に存在して居るか、その事を知らせたいといふために、佛は世の中に出たのだと言はれた。

そこでその佛のお考から言へば、吾々凡夫の考へた大きい、小さいといふことは違ふわけです。吾々凡夫の方から考へれば、人に好く思はれるとか、思はれないとかいふことが、大變大事な事です、或は金が儲かるとか、儲からないといふことが大事な事になるでせう。それは五十年か六十年の生命を永遠の生命と思ふところから、そんなことが出来て来るのでせうけれども、佛様のやうに全部を見透して人間の生命が五十年や百年では終らない、永遠の生命だといふことを見透して居らつしやる、さういふところからお考へになつた一大事といふことは、人間の一大事とは違ふに相違ない、その意味をこれからだん／＼説いて行かれるわけです。

舍利弗、云何なるをか諸佛世尊は、唯だ一大事の因縁を以ての故に世に出現したまふと名くる

たそのお考、佛の見極められたところといふのは、要するに人間の生きるといふことの本當の意義でありませう。それが普通の人間には解らないから、その大勢の人間に、結局はすべての人間に佛と同じやうな心持を持たせるために、佛が世の中に出られたといふのです。

これは前にも申した事でありませんが、惑ふといふことと、覺るといふことの根本がどこで定まるか、惑ふといふことは、小さい自分を主にしてすべてを考へること、覺るといふことは、小さい自分を主にする心持を捨てること、斯ういふやうに考へていゝわけです。人間は一人で生きて居るものでない、共に生きて居るのです。共に生きて居ると申しましたも、世の中の物はみな一緒にあるといふことは、誰も異議はないでせう、天地間に孤立して居るものは何もない、人間だつて大勢一緒に生きて居るし、草だつて、木だつて澤山一緒に生えて居るし、家だつ

(舍利弗 云何名諸佛世尊 唯以一大事因縁故 出現於世)

佛様が世にお出になるのは、人間の一番大事な事を説き明かすためだであるが、その一大事の因縁といふ意味は一體どう考へたら宜からうか、その事をモウ一層繰返して言つて見よう。

諸佛世尊は、衆生をして佛知見を開かしめ、清淨なることを得しめんと欲すが故に世に出現したまふ。衆生に佛知見を示さんと欲すが故に世に出現したまふ。衆生をして、佛知見を悟らしめんと欲すが故に世に出現したまふ。衆生をして、佛知見の道に入らめんと欲すが故に世に出現したまふ。

(諸佛世尊 欲令衆生開佛知見 使得清淨故 出現於世 欲示衆生 佛知見故 出現於世 欲令衆生 悟佛知見故 出現於世 欲令衆生 入佛知見道故 出現於世)

「佛知見」といふのは、佛の斯うだと見極められ

て一軒やそこらあるのではない、何軒もあるのですから、世の中のものも共存するといふことは誰も異議がない。併ながら共存するといふ中にも、いろいろな共存があるでせう。

例へて言へば、今此處に机がある、この机の上へ私が本を置く、さうするとこの机と、この本とは共存して居る。併ながらこれは一時的のものでせう、私がたゞ便宜上この本をこの机の上に置いたのですから、机の上に置かないでもいい、手に持つて居てもいいけれども、この上に置く方が便利だから机の上に置いただけの話ですから、この机とこの本の共存の状態といふものは、ほんの一次的のもので、私が歸る時にはこれは持つて歸つてしまふ、ですからこの机と本とは離れ／＼になる、斯ういふやうな共存の状態がありませう、それを「偶然の共存」と申します。それに對して「必然の共存」といふものがあるわけです。偶然といふのは、偶々便宜上一緒

に居るだけの話であつて、永遠に一緒に居るとは限らないもの、今この机の上に本を置いたのなどはその一つであります。ところが此處に時計がありますその時計の針だの、ゼンマイだの、齒車が一緒に集つて時計を作つて居るといふ、この事實に付て見ると、これは机の上に本を置いたのとは大分違ふ、直ぐ離れてしまふものぢやない、時計その物がある間は、その針と、その齒車と、そのゼンマイとは一緒に働いて居つて、さうしてみな相集つて時を示して居るでせう、さういふやうなのを必然と言ひます。必然といふのは、無暗に離れない、いつまでも必ず一緒に居なければならぬ、斯ういふ風に考へられる。だから物が共存するといふことはチョット共存して直ぐに離れてしまふものと、それから永久にいつまでも一緒に居られるものと、斯う二つになるわけです。

人間の事でもさうです。私が自分の家で女房や子供と一緒に居られない、それは偶然の共存であるから意味は無い。さういふわけで、共に存すると言つても偶然に存するものと、必然に存するものがあるわけです。

ところがその必然の共存といふ中にも亦二つありまして、機械的と有機的とあります。「機械的」といふのはどういふのかといふと、一緒に居るのだけれども、併しその一部分が離れてもやはり存在の意味を有つて居るもの、これを機械的といふ。今の時計の場合などはそれです、時計の針と齒車とゼンマイとが一緒にありますけれども、併し私の持つて居る時計の針を取つて、同じ大きさの他の時計にくつ付ければ、やはり針として役立つのです、私の時計のゼンマイを取つて、同じ大きさの時計にくつ付ければ、やはりゼンマイとして役に立つ、斯ういふのは必然ではありませんが、機械的の共存です。この電気燈だつて、こつちの笠を取つて向ふの同じ大きさ

供と一緒に暮して居るといふ、斯ういふことは必然の共存です、いやになつたら直ぐ離れてしまふといふやうなものではない。けれども電車に乗つて来る途中で隣合つて腰掛けたといふのは、それは偶然の共存でせう、特別にあの人と一緒に腰掛けたと思つて乗つたわけぢやない、どうかした拍子で隣合つたのですから、それは偶然です、それを一緒にするわけには行かぬ。必然の方はこれは離れることが出来なものですから、お互にその料簡になる、子供なら子供が夏休に何處かへ旅行したいと言へば、親父は仕様がなから小遣錢をやるのか、どうも夏になつて冬帽子でもいけなから麥稈帽子を買つて呉れと言へば、買つてやるのか、これは必然の共存だからであります。けれども電車で隣合つて腰掛けた人に何か買つてやるわけには行かない、「この間君と音羽まで一緒に乗つたから五圓貸して呉れ」と言つても、私は御免を蒙る、そんなのを一々相手に

の電気の笠にくつ付けても、やはり笠として役に立つ、斯ういふやうなものは必然ではありませんけれども、機械的の關係と言つていゝでせう。ところが人間の身の目だの、鼻だの、耳だの、口だの、手だの足だのはさうは行かない、全體から離れれば意味は無い。目といふものは身に付いて居るから自なのでせう、身から離れてしまへば目ではない、「どうもあの人は目の美しい人だ」と言ふ、しかしその目をくり抜いて持つて来て、「どうだ、美しい目だらう」と言つても、誰も美しい目だとは思はない。頭の髪なども、御婦人は殊に頭の髪を気にするが、「どうもあなたのお嬢さんの髪毛は洵に黒くていい」と言ふけれども、頭に付いて居るからいいので、髪毛だけ切つて持つて来て、「どうだ、いい髪毛だらう」と言つても、誰も褒めはしない。斯ういふやうなわけで、全體を離れればその部分は意味を成さないものになるさういふのは「有機的の共存」と言はれるのであり

ます。

それで人間が相集つて家を作り、社會を作り、國家を造つて居るといふことは、共存の中に於ての有機的の共存であります。全體を離れて意味は無い。日本人が日本を離れて世界を歩きましても日本人であります。顔付きが日本人であり、言葉が日本人であります。私なども少しばかり外國を歩いて來ましたけれども、何處へ行つても日本人といふことを離れるわけに行かない。それは法律の手續か何かで亞米利加に歸化するとか、英吉利に歸化するとか出來ませうけれども、歸化して見たところで日本人は日本人です、顔付きから身付きまで變へるわけに行きません。さういふやうに人間の存在といふものは全く有機的の、西洋の言葉で言へば Organic の存在でありまして、その全體を離れて部分といふものを考へるわけに行かない。人間はさういふやうな本性を有つて居りまして、どうしても人間は一人で生きて居られ

に生きよう、榮えるのも共に榮えて行かう、生きるのも共に生きて行かう、共に共にといふ、その大きな所に眼を著けるといふことが、それが覺るといふことです。だから覺りの極致に入つた佛様は、一切衆生の苦みを自分の苦みとする、一切衆生の喜びを自分の喜びとすると言つて居られる。涅槃經の中に「一切衆生異の苦を受くるは悉く是れ如來一人の苦なり」とありま

とあります。一切衆生といへば、世の中のありと有ゆる人間、それが異の苦を受けるといふから、さまざまの苦みを受けて居るが、佛様はすべての人々の苦みは悉く是れ佛様一人の苦みだと思ふ、世の中に一人でも苦む者のある間は自分は安心しない、衆の苦むことは自分の苦みとして引受けて、自分の力を以てすべての人の苦みを解決してやらなければ氣が濟まぬ、斯う言つて居られるのであります、それが覺りの極致に入つた佛様のお言葉である。であるか

るものではないので、遠い昔から一緒に生きて居る一緒に生きて居る間に、共に生きるだけではない、共に育つて來て居る。一緒に生きて、一緒に育つた言葉にしたところが、風俗にしたところが、習慣にしたところが、みな一緒に生きて居る間に自然に出來たものであります。

佛教はそこを捉まへて居るのです。今申すやうな言葉は私が自分の勝手な言葉で言ふのですが、佛教ではそこを捉まへて居るのです。さういふやうな人間であるのだから、他の人間を離れて自分だけを考へるといふことが、それが煩惱だ、人間一人で生きて居られないものなのだ、又今まで一人で生きて來なかつた、一緒に生きて來た、一緒に生きて來た人間が一切の人類を離れてしまつて、小さい自分だけを取り離して考へるといふことは、それは間違です。それが所謂「惑」まよひです、その小さい自分に執はれるといふことを捨て、しまつて、一切の人と共に

ら惑ふといひ、覺るといふことをいろ／＼の方面から言へるけれども、簡単に言へば、一切の人を離れて自分だけを中心にして物を考へる方が惑ひであつて、小さい自分を捨て、一切衆生と共にといふ考がシツクリと固まつた時が、それが覺りの道に入つた時である、斯ういふやうに言へるわけです。簡単に言つてしまへばそれまでありますけれども、さういふ心持を作るには骨が折れませうが、兎に角さういふやうに標準が付くわけであります。

それだから「一大事」とは何かといへば、衆が佛のやうな心持になるやうにしてやるといふこと、それが一大事です。言換へれば、衆が小さい自分に執はれる心持を捨てるやうな道を聞いてやるといふこと、それが一大事である、斯ういふやうに言はれるのであります。小さい自分を捨て、見ると世の中は樂になり、明るい氣分になるのです、お互が小さい自分といふも

のを捨てた時に於て、どれほど楽になるか解りはしない。これは電車の乗降でも解つて居る、乗る人は「俺が乗るのだ」と思ふ、降りる人は「俺が降りるのだ」と思ふから、乗る方から言ふと降りる人が邪魔で、降りる人から言ふと乗る人が邪魔になる。お互に乗る人は「降りる人は急ぐだらうナ」と思ひ、降りる人は「乗る人は忙しからう」と思つて、向ふの立場に身を置いたならば、お互に電車の入口で身を躲す時に、両方が身を脇へ寄せて、歩み合ひをして入れ交はることが出来る筈です。みながすべてさういふ料簡であつたら、どれほどいゝか解りはしない、それは一度やつて見れば解るのですが、ついお互に凡夫だものですから忘れてしまふ、やはり急いで降りる時には乗る人が邪魔になり、急いで乗る時には降りる人が邪魔になる。けれどもどうかした拍子に、乗る人と降りる人とがお互に譲り合つて、身を小さくして笑ひ顔をしてスツと入れ交はつた時が

張るのを経験して後に、乳を飲めば腹が張るといふことが解るけれども、生れたばかりの時に、乳を飲んで腹が張るといふことは解りはしない。だから赤ん坊が母親の膝に寄つて行くのは、飲みたいためではない、たゞなつかしいから、何だか離れられないから寄つて行く。母親が子供を抱き上げる時もさうです、自分が産んだものだからこれは育てる義務があるなどと、そんなことを初めから考へるわけぢやないのであつて、自分の産み落したものは何だか手離すに忍びないから自然抱き寄せる、その時に於て既に小さき自己を捨て、他の喜びを喜びとし、他の苦みを苦みとするといふ本性が現はれて居るわけです。だから人間が小さい自分を捨てるといふことは、何も無理な註文ぢやなくして、人として世の中に生れた初めから持つて居る本性なんです。その本性を發揮するか、しないかといふ問題になつて來る、そこに難かしい言葉で言ふと「佛性」といふも

あつたとしたら、その時は實に好い氣持に相違ない萬事がさうです、小さい自分を捨てるといふことは決して損ぢやない、小さい自分を捨てるのが結局自分を愉快にする本です。自分を捨て、行つて初めて自分といふものを愉快にする、そこが思ひ切りです、その思ひ切りは一口に言へばわけではないのですけれども、なか／＼出来ません。そこでだん／＼に修行をして、佛様のやうな、一切衆生の喜びを喜びとし、一切衆生の惱みを自分の惱みとするといふやうな、そんな心持に衆をしてやりたいといふこと、その目的を以てお釋迦様でも、他の佛様でも世の中に出て衆に教をお説きになつた、斯ういふことです。それはみな考へて見れば、自分が生れながら持つて居るものだといふことに氣が付く筈です。赤ん坊が生れて直ぐに、母親の膝の上にすり寄つて掴つて來る、その時に、乳を飲んだら腹が張るといふことは知つて居やしない、幾度も／＼乳を飲んで腹の

のがあるわけです。

昔から三因佛性といふことを申します、

正因佛性

了因佛性

緣因佛性

これを「三因佛性」と申します、「正因佛性」といふのは今申したそれなんです、正しく生れながらに具えて居る佛性です。子が親を慕ふ場合、親が子を膝の上に抱き上げる場合、理窟も何もありません、教も道も何にもまだ辨へない、たゞ人が人であるがために、自ら自分を捨て、親み合ふ、睦み合ふといふ、さういふ本性です。その本性が本になつて大きくなつて行けば、一切衆生の苦みを自分の苦みとし、一切衆生の喜びを自分の喜びとするといふ佛の境界にまで行けるだらう、それが正因佛性、正しく生れながらに具へて居る佛性であります。ところがその佛性といふものが、放つて置いてど

の位の程度まで發達するものかといへば、それはなか／＼思ふやうに發達はしないのです。何故ならば人間が斯ういふ物質の世界に生きて居りますから、生きるためにいろ／＼な欲望がある、その欲望といふものは限りなく發達するけれども、その欲望を充たすところの物質には限りがある。ですから斯ういふ生活を居りますと、本來さういふ尊い性質があるのだけれども、周囲の境遇、事情のために妨げられて、その性質は發達しないで終る。丁度寒い風の中に木の芽が生えたやうなもので、伸びさうなものだけれども、周囲の風が冷めたから伸びさうないで終ることと同じです。そこでどうしてもその尊い佛性を育てるためには、さういふ大事な點に早くから眼を著けた人の遺した教に依つて、この尊い性質を育て、行かなければならぬといふことになつて來る。そこでその教に依つて修養をする、學ぶ、その學ぶことに依つて仕上げた佛性、それが「了因佛性」と

ます。正因は生れながらにして具へて居るといふこと、了因は學ぶことに依つてその佛性が發揮するといふこと、緣因といふのは日常の行ひの上に自ら實行して見て、その實行に依つてそれが自分の物になつて行くといふこと、これを三因佛性と言ひまして三つの佛性です。

ところで根本から言ふと、その學ぶことが出来るといふこと、實行することが出来るといふことが、やはり自分の本來の佛性のあるお蔭だといふことになつて、それで三つが初めて一つになつて來る。だからこれを三つにしただけではいけないので、假に三つにしたのですが、根本は一つになつて來る。若し人間が本來佛性を具へて居るものでなかつたならば、教といふものも出て來ないだらうし、こつちが親切にしたところで向ふが受付けなければならぬ、斯うなりましたら、人々がみな一人で生きて居られないといふ本性を有つて居る、それが根本です。そのた

いふものです。「了」は仕上げるといふ意味です、學ぶことに依つて仕上げる、生れながら持つて居るものを育て、大きくして、だん／＼物にして行くのです、さうなつて初めて佛になるやうな緣がだんだん近くなつて參ります、これを了因佛性といふ。ところがモウ一つ茲に考へなければならぬのはそれならば物を習つて行きさへすれば、人間の本來有つて居る佛性が十分に發揮されるかと言へば、さうも行かないのであつて、これはたゞ學問ではありませんが、人間の行ひに關係の密接なことでありますから、假令どんな聖人、賢人が説いた教を千萬言學んだところで、學んだだけではまだ物にはならないのであつて、それを自分が實行して見て初めて「ハア、こゝだナ」といふことが解つて來る、それが所謂「緣」といふものです。緣に依つてそれを實際に行つて見る、さうして「こゝだナ」といふところが掴まるのであります、それを「緣因佛性」と言ひ

めに教といふものも出來て來るし、そのためにその實行といふものも出來て來る、斯うなつて參りまして、正因佛性といひ、了因佛性といひ、緣因佛性といふものが、結局一つで解釋が出来るわけです。

教へるとか、教へられるとかいふことが世の中に存在するといふことは、人が本來一人で居られないといふ本性があるからだ、斯うも言へるのです。親切を盡すとか、盡されるとかいふことの存在することとは、それは人間が本來一人で生き得られない本性があるからだ、斯うなつて來るわけです、つまりそれが一つに解釋が出来る。その佛になるやうな尊い性質が人々に元來あるといふ、その事を十分に氣が付くか、ぼんやり氣が付くか、まるで氣が付かないか、それはマアその人々の程度に依つて違ひませうけれども、まるで氣が付かない人でも、自分勝手なことをやつて居つた時に、何だか氣が濟まないといふ氣持があるものです、さうして見ると、やはりど

こかで氣が付くのだといふことにもなるわけです、そこはマア非常に尊いところであります。少し亂暴な事を言ふやうであります、人間が嘘をつくといふことは有難い事です、何故なら、嘘をつくといふことは、よく見せたいといふために嘘をつくの事です、嘘をつかない人間になつたらどうでせう、恐ろしいものです。例へば人の金を盗りながら「私は盗りません」と言ふ、「盗りません」と言ふのは、やはり盗らない方が善いと思ふから「盗りません」と言ふのでせう、「盗つたがどうした、何でもないぢやないか」と言ふやうになつたら、随分世の中は危いでせう。だから嘘をついて居る間はまだ「頼もしい泥棒を捕へて」「貴様、あそこで人の墓口を盗つたら」と言ふ時に、「盗つたが、何が悪い」斯うなつて來たら世の中は物騒です。さうは言はない、「いや盗りません」と言ふ、「盗りません」と言ふだけまだしほらしい、やはり盗らないのをいと思ふか

ら「盗らない」と言ふ。ですから教も道も何も知らない人でも、教にも道にも遠去かつて居つて何だか物足らないといふ心持がある、そこに人間の本来の佛性といふものが現はれて居る、斯う考へなければならぬ。

それです。佛は「一切衆生悉く佛性有り」といふことを、さういふことを本にして言はれる。一切衆生佛性があるのだ、悪い奴でも嘘をつくではないか、現に嘘をつかない悪人といふものはない、嘘をつくといふことは、自分が悪い事をして居て、悪い事を蔽ひ隠したいといふ望があるのだから、まだまだそれはまるで悪の塊ではないのであつて、悪の底に何物かある。斯ういふことで一切衆生はみな佛になる性質がある、といふことが言へる。それであるから今茲で、佛の性質を發揮させたい、佛の智慧を興へたいと仰せられたことは、少しも無理な註文ではなくして、結局はお前達みな有つて居る

本性があるが儘に發揮させたいといふことになつてしまふ、少しも無理な註文ではない。併ながらどうも吾々は偽りの生活に永い間慣れて居るものでありますから、その無理でも何でもない註文を聞いた時に、何だか恐ろしくなつて來る。

人間慣れないといふことは恐ろしいものです。私の元教へて居た學生で、小學校の教師になつて、飛驒の方に永い間行つて居つた男があります、三十年も山の中ばかり歩いて居た。それがこの頃東京へやつて來まして、私の家にやつて來て、一緒に銀座通りを歩いたところが、銀座通りが歩けないと言ふ、傾斜の地面ばかり歩く癖が付いて居る、平らな所を歩くと足がヨロ／＼先へ出て歩けない。「どうしたのだ」と言ふと、「どうしたのか知らんけれども、どうもチツトモ歩けません」と言ふ。それは可笑しいものです、吾々は平らな所なら歩き易い、傾斜の山路なら歩きにくいと思ふけれども、山路ばかり歩

く癖が付くと、何時でも足を前へ持上げなければ歩けない、だから平らな所に行くに前へ轉びさうになつて歩けない、永い間の習慣といふものは恐ろしいものです。私はその人と歩いてつく／＼感じた、人間はこれなんだ、一體人間が、本來は小さい自分には執はれない本性があるのだからうけれども、永い間他の人を排斥して自分を中心にする生活ばかりをして居つたものだから、今茲で佛の大慈悲などといふものに出會ふと、まるで自分と様子が違ふ、どこからどうやつていゝか解らなくなつてしまふ。丁度山坂を歩いた人間が平地を歩いて困るやうに、私共は困つて居る、永い間自分を中心にする偽りの生活ばかりやつて居つたものですから。……けれども慣れれば、小さい自分を捨て、人のために力を盡すといふことが、それが人間の本性であるから、丁度慣れれば平地を歩くのが樂なやうに、結局は樂になるに違ひない。そこまで辛抱してやつて見なければ

ならぬのでありませう。

斯ういふやうに考へて見ますと、この經文はよく讀めるやうであります。一大事の因縁を以ての故に世に出現したまふといふことはどういふことか、それは衆生をして佛知見を開かしめることである、又佛知見を示すことである、又佛知見を悟らしめることである、又佛知見の道に入らしめることである、即ちこゝに

開示悟入

といふ四つのことがありますが、これは如何にも巧く順序を逐うて言はれて居るやうであります、譬へて見ますと、斯ういふ部屋がある、



四〇

一方の部屋は眞暗で、一方の部屋は明るい、この眞暗な内に大勢居る、これが凡夫の生活です、人生といふものゝ本當の意味が解らない、何だか知らんが眞暗な内でお互にぐす／＼やつて居る。そこで明るい部屋に居る人——どうかしてこの暗い部屋からこの明るい方の部屋に入つて、明るい所に慣れた人はこの暗闇の人間を氣の毒に思ふでせう、そこでこの暗闇の人間を明るい所へ連れて来てやりたいといふ心持を起すわけです。ところがなか／＼急に暗闇の者を明るみへ連れ込むわけに行きませんから、そこで開示悟入をやる。先づ以て「開」戸を開ける、こ

の間の襖を開けて見せなければいけない、向ふの者は暗い所に慣れて明るい所を知らないから、兎に角知らせなければいけない。間の隔ての襖を開けますと、光がバツと暗闇に入る、その時に逃げてしまふ者がある、今まで暗闇に慣れてしまつた者が、急に光が来たから驚いてしまつて、「これは大變だ、どんな目に會ふか解らない」と言つて、この光を見て逃げてしまふ。襖の蔭に逃げ込む者がある、これが大分多い、教だの、道だのといふことを聞くと恐ろしくなつてしまつて、光といふものが怖い、さういふのがあります。私共の子供の時から友達なんかでも、よくそんなことを言ひます、「小林はこの頃佛敎の事をやつて居るさうだ、自分も佛敎の事を聴きたいと思ふけれども、さういふことを下手に聴くと勇氣がなくなるだらうと思ふから聴かない、大いに儲けてそれから聴きに行かう」などと言つて居る者がある、さういふ人間は光が怖い、「サア大變

だ」と言つて暗闇に逃げ込んでしまふ連中でありま

そこで戸を開ける、佛知見を開くといふのは、自分にも佛と同じやうな性質があるのだといふことに氣が付かせる、これが「開」です。それで氣が付かないで暗闇に逃げ込んでしまふ者は、これは急に行きませんから、そのうち又然るべき機會を以て明るみへ連れ出すやうにしなければならぬのであります。中には光がさしたのを見て「ハハアどうも今まで斯んな思をしなかつたが、大分好い氣持だナ」と言ふのもあります。

そこで今度は「示」といつて、此處に連れて來る「好い氣持ならそんな奥の方に居つても仕様がな

此處へ來い」と言ふので、戸口の方に連れて來てその部屋の内を見せる、それが示です、佛の道を學ぶと斯ういふことが出来るのだ、大體斯んな行ひが出るのだ、大體斯んな様子になるのだといふことを

見せてやる、これが示であります、「佛知見を開き
て清浄なることを得せしむ」といふことは、言換へれ
ば、その暗闇から明るみに出る氣持にさせることで
す。清浄といふのは小さい自己に執はれる心持を離
れさせること、今までは小さい自己に執はれまして
貪るとか、憎むとか、嫉むとか、そんなことばかり
やつて居りましたから、さういふ氣持を捨てさせて
佛の道の尊いことに氣がつくやうにしてやる、斯う
いふことです。その次には衆生に佛知見を示すので
すから、佛様といふものは斯ういふものだ、佛様の
智慧を以て世の中を見ると、大體斯ういふやうに見
えるのだといふことを見せる、つまりこの入口へ連
れて来て内をよく見せてやる、「どうだ、お前の元
居つた暗い部屋に較べるとこの部屋の内は明るくて
綺麗ぢやないか、よく見ろ」と言つて見せてやる、
それが示すといふことであります。
そこで示したきりで、目を障つてばんやりして立

興心がなければ、濟ひといふものはお前には及ばな
い、だから濟はれない、佛に近づきたい、佛の境界
に到達したいといふ心持を起せ、斯ういふことを教
へ込む、それが悟らすといふことです。

宗教の事は奮發しないで出来ることではないので
す。さう言ふとチョット誤解がある、世間には他力
といふやうなことを言つて、佛様にお任せ申せば、
自分が何も骨折らないでも濟はれるといふ議論をす
る人がある、さういふ議論をお聞きになつた方には
「骨折らなければなどいふ、そんな筈はない、骨
折らないでも濟はれるといふ教が一方にチャントあ
るぞ」斯ういふ議論が出て来るかも知れない。それ
は一應尤もでありますけれども、一切を思ひ捨て、
佛に頼るといふ心持を作るのには骨が折れます、や
はり一切を思ひ捨てるなどといふことは容易に出来
るものぢやない、普通の人には捨てられはしないの
です、「どうぞお頼み申します」と言ふ心持が出来

疎みまして、なか／＼内へ入らうと思はない者もあ
る、これはどうも仕様がな、暫くそこに立たして
置く。その中に、こつちの部屋は綺麗だナ、こつち
へ入つて見たいナと思ふ人がある、さういふ人には
「悟」といつて、悟らせる。悟らせるといふのは努
力を奨めるのであります、骨折らなければ出来ない
ぞ、お前は凡夫なだから、佛様が羨ましいと思つ
たつて、一足飛びに佛に成るんぢやないぞ、だから
骨折らなければいけないぞ、この部屋の内に入つて
来るには、歩いて自分で入つて来なければならぬ、
誰か後から押ししたり、手を引張つて内へ入れてやる
といふことは出来ない、自分で奮發して、自分で内
へ入らなければ、入れるものぢやない、だから入り
たいと思ふなら、立つて歩いて入つて来い、斯うい
ふやうに教へる、それが悟といふことです。つまり
悟といふことは、努力の尊いことを示す、お前自分
でやれ、佛の濟ひといふものも、濟はれないといふ

るまでには、なか／＼骨が折れる、普通で出来るも
のぢやありません。自分の勝手なことがある、金が
欲しかったり、地位が欲しかったり、身分が欲しか
つたり、權勢が欲しかったり、大きい家に住みたか
つたり、いろ／＼ある、それを思ひ切つて、佛様に
お頼み申すとなるまでには随分骨が折れる、だから
他力でも、骨折らずに他力に絶つことは出来はしま
せん。殊に今日のやうな複雑な世の中で、今日のや
うに批評的な教育を受けて居る人間が、一切を思ひ
捨て、佛に絶つなどといふことは容易な骨折で出来
ることではない。であるから何といつても骨折らず
に濟はれるといふことを考へるのは無茶です、そこ
が悟といふものです。明るい所へ入りたいと思ふな
らば入る氣分になつて、自分で奮發して入るやうに
骨折れ、斯ういふやうに教へる、衆生をして佛知見
を悟らしめるといふのはそれでありませぬ。佛の智慧
を具へるのには斯ういふ修行をして、斯ういふこと

に骨折つて、さうして佛に成れるのだといふことを知らせるために、世の中に出て居らつしやる。

悟つて来れば、今度は「入」といふのは、この明るい部屋の内に入つて来る。今度はそれを誘ふて、佛といつてもいきなり佛には成れませんから、菩薩の行を續けて、さうしてその途中で力が弛まないやうに、途中で覺悟が挫けないやうに、菩薩の行を續けて、結局佛に成るまで骨折らせる、斯ういふことが所謂佛の知見の道に入らしめるといふことで、これは一番最後であります。

斯ういふやうにして、「開示悟入」で、明るい部屋を開けて内の様子を見せて、それから入らうといふ心持を起させて、遂にその人を引連れて内の明るい所に入れる、斯ういふやうに佛が世の中に出られるのは、開示悟入の四つの道を盡すために世間に出られるのであります。結局は一大事の因縁といつて、人々が本當に人間として生きる生き方が出来る

に申したやうに聲聞といふものがあり、縁覺といふものがある、聲聞とは佛の教を耳に聞いて世の中の無常を知つて、世間に執はれない心持を作るまでになつた者、縁覺といふのは自分の毎日出會ふところの日常の出來事に依つて佛の教を思ひ合せて、工夫を積んでさうして世の中に執はれない心持になつた者、その聲聞とか、縁覺とかいふものはみな佛の弟子だと思はれて居つた。それをぶち破つて、佛はただ菩薩を教化するために世の中に出たのであつて、菩薩の道を學ばない者は佛の弟子とは見做さないぞといふのですから、これは大變な事です。成程「佛舍利弗に告げたまはく」と態度を變へられた筈です。世に執はれない心持を作つただけでは駄目だ、この事をハッキリ名乗られたのでありますから、これは驚くべきことです。

何故かと言ふと、世に執はれない心持を幾ら作つても、執はれない心持が徹底的に作り上げられるも

やうにしてやらう、斯ういふ積りで世の中に出現せられるのであるといふのであります。

舍利弗、是を諸佛は唯だ一大事の因縁を以ての故に世に出現したまふと爲くと。

(舍利弗 是爲諸佛 唯以一大事 因縁故 出於現於世)

斯う一應佛の世に出られた目的を説明された。そこで今度は言葉を変更して、非常に嚴格な言ひ方をされる。

佛、舍利弗に告げたまはく、

(佛告舍利弗)

今度はお釋迦様が容を改めて、舍利弗に仰しやつた。

諸佛如來は但だ菩薩を教化したまふ。諸の所作あるは常に一事の爲なり。

(諸佛如來 但教化菩薩 諸有所作 常爲一事)

これは驚いたことです。といふのは、今までは前

のぢやないのです。何故なら、金も要らない、位も要らない、地位も要らない、何も彼も要らないとスツカリ思ひつめた時には、金が欲しい、位が欲しい、地位が欲しいといふ人々と自分とは段が違ふなといふことだけが頭に残る、それではまだ本當ぢやないだから悟り切つた積りで、「俺は悟つたナ」と思つた時には、世間の人達と自分との間に境界線を一ツ引いて居るのですから、それぢや本當ではない。そこを捨てなければいけない、それがなか／＼難かしいのです。「世間は迷つて居る、俺は悟つて居る」「世間は金を欲しがつて居る、自分は金は要らない」「世間の人間は大きい家に住みたがつて居る、自分は草屋でも満足だ」……斯うなつた時に果して満足でせうか、満足ぢやない、何故満足ぢやないかと言へば、金を欲しがると人が何千萬、何億萬、金の欲しくない者は自分がたゞ一人だ、さうなつた時に於て「大勢の人間と自分の心持とは違ふナ、自分とは違

つた道を歩いて居るナ」と思つた時に、どうしたつて淋しく感じなければならぬわけです。それですから「人は迷つて居る、自分は悟つたナ」といふ感じは、決して好い感じぢやない、淋しい感じですが、大勢は右を向いて行くのだ、自分は左へ行くのだといふのですから、淋しい感じですが、それでは本當の満足ではないのです。もつと進んで、「あの右の方へ向いて居る人間も結局自分が左の方に向けてやれるのだと思つた時に、そこに初めて本當の満足がある。それだから菩薩の行を考へなければ、決して解脱といふことの出来るものぢやない、何故なら解脱して居ると思ひながら淋しい、「世間の人はみな右の方へ行く、俺だけは左だナ」と思ふと非常に淋しい。それで今の凡夫である私共がそんなことを言ふと、何だか誇大妄想狂見たいになつてしまふが、結局佛の教を實行して、菩薩の行を積んで行く、自分は今直ぐとは行かぬが、後の後に於ては、世の中の人

みな自分の歩いて行く道へ後について来て呉れるのだといふ、そこに望を有つて居るのです。それだから衆をこの道に入れる、それがなければ淋しいのです、だから解脱を求めただけでは解脱は得られない、一切の人を濟はうといふ心持が起つた時に、初めて本當の解脱が得られる、淋しい心持がなくなるといふやうに考へられる。

そこが所謂大乘の教といふもの、大事な點であります、それをこゝでハッキリ言つて居られる、菩薩の道を行する者のみが俺の弟子だ、自分一人助かるといふことを考へてはいけない、他の人間も同じ道に入れよう、他の人間をも同じ悟りの道に誘ふて行かうといふその大決心をする者が、それが佛の弟子なんであつて、さういふものを養成しようと思つて居るのだ、そこに行く階梯として聲聞とか、縁覺といふやうな、世間に教はれない心持を起せといふことを言つて來ただけけれども、それで自分の

教が終つて居るのではない、自分の教といふものは結局菩薩といふ、己を濟ひ、人を濟ひ、己を悟らしめ、人を悟らしめるといふ、自他を共に全うする心持の者を作るために教を説いて居るので、諸の所作いろ／＼な教を説いて、いろ／＼に大勢を濟ふために働いたけれども、その働いた結局は一事の爲である。一事の爲とは、一切の人間を佛様御自身と同じものにしてやらうといふ、さういふ大目的のためであります、外には何もありません。言換へれば、唯だ佛の知見を以て、衆生に示悟したまはんなり。

(唯以佛之知見示悟衆生)

たゞ佛の知見を以て大勢の人間に指し示して、大勢の人間を悟らしめようと思つて居るのです、それですだからその意味が低い教の中から汲み取られなければならぬ。これはチヨット言過ぎるか知れませんが、一體極く嚴密な意味で言ふと、佛教で小

乘經といふものはないのです、私はさう思ふ。何故なら「阿含」といふやうなものが小乘經だと説かれて居るけれども、併し阿含を讀んで見れば、やはり己の行ひを慎むことに依つて一切衆生に感化が及んで、周圍が自ら清らかなものになるといふことは到處に言つて居る、だから嚴しく言へば小乘經といふものはないわけになる、佛の經典はみな大乘教であるべきです。たゞそれを較べて見て、己の行ひを慎むといふことを説かれて居る部分が多いから、後世から見てそれを小乘經と言ふのですけれども、お釋迦様に説明をして戴いたら、小乘經はないと仰しやるだらう。自分の行ひを慎むことが本當に出來さへすれば、周圍に感化が及ぶ、人を感化しないで自分一人善くなつて居るといふことは、人生に於てあり得ないことである。であるから小乘の教と言はれるものでも、深くこれを味つて行けば、世を濟ひ、人を濟ふ心持がやはりそこから出て來なければなら

ぬのであります。

要するに佛教といふものは小さい自己に執はれるものではない、それは浅く見れば格別だけれども、それを深く味つて見れば、どの經典を讀んでも、小さい自分に執はれて人を捨て、いゝといふ教はどこにもありはしない、斯ういふことが言へるわけです。それはその筈でせう、佛の大慈悲が現はれて教となつたのですから、どこだつて佛の慈悲心が現はれない筈はない。部屋の中に大きな光があれば、壁に小さい穴があつても、その穴からやはり光が外に漏れるのであつて、どんな小さい穴でもその穴から内の光が漏れる、それだけの尊い大慈悲心の現はれない教といふものがあらう筈がない。だから大體に於て大乘とか、小乗とかいふ區別を立て、居りますけれども、要するに佛の教といふものは所謂菩薩の行といつて、佛の心持を自分の心持として、世のため、人のために盡すといふ、そこまで行かなければ、佛

のお弟子とは言へない筈です。

舍利弗、如來は但だ一佛乘を以ての故に、衆生の爲に法を説きたまふ。

(舍利弗 如來但以三佛乘故 爲衆生説法)

だから「一佛乘の故に」と仰しやつた、いろ／＼の教があるけれども、結局衆佛に成るといふ、佛の心持を以て自分の心持とし、佛の態度を以て自分の態度とし、さうして自ら佛に成るのみならず、人も佛にしてやるといふ、さういふ心持を作らせる教それが本當の教です、そのためにながい間、四十年も五十年も衆生のために法を説いて居つた。

餘乘の若は二、若は三有ること無し。

(無有二餘乘 若二若三)

だから法に二つも三つもあるといふことはありはしない、形の上ではあるやうに見えるけれども、精神から言ふと全く一つだ。

舍利弗、一切十方の諸佛の法も亦是の如し。

(舍利弗 一切十方諸佛法 本如是)

それはこの娑婆世界ばかりではない、十方の世界といふ廣大無邊の世界に於て、數限りないところの佛様がお出になつて、その佛のお説きになつた教でもみなさうだ、佛の教といふものはみな同じことだ

舍利弗、過去の諸佛も、無量無數の方便、種種の因縁、譬諭言辭を以て、衆生の爲に諸法を演説したまふ。

(舍利弗 過去諸佛 以無量無數方便 種種因縁 譬諭言辭 而爲衆生 演説諸法)

又今の世ばかりでない、過去の世に出られた佛様が、數限りない方便を以て、種々の事柄をお説きになつたり、又いろ／＼の譬を以てお説きになつたり又種々の巧みなる言葉を使つてお説きになつたとしても、それもやはり大勢の人間に教をお説きになるといふことは、結局一佛乘のためである、衆を佛と同じ境界にしようといふことに外ならない。これが

所謂「諸佛同道」諸佛道を同じうするといふ意味です、佛様がどれほど澤山お出になつても結局道を同じくする、絶對の眞理といふものは二種あるものではないから、どの佛様のお覺りになつたことも結局同じ覺りです、又どの佛様のお説きになる事も結局一つ所に歸着する、二種も三種もあるものぢやないといふのであります。

そこでチヨット話が横道に入りますが、さういふ風に考へて見れば、どれでもいゝぢやないかといふことになるでせう。併しそれはどれでもいゝとは言へないので、つまり低い方の教は高い方に入るための路筋なんですから、低い方の教を聽いてそれだけで腰を落して、そこに止つてしまつてはいけない、この事は私は斯ういふ風に考へるといふと思ふ、東京から京都まで汽車に乗ります、このレールは東京から京都まで續いて居るのです、品川で見ても、横濱で見ても、このレールは確かに京都まで續いて居

る、その續いて居るといふことを氣が付かないで、レールが途中で終ると思ふのは間違です。さういふ意味で、どんな低い教でも佛の大慈悲が示されて居るといふことは、ごこのステーションで見てもレールは終局まで續いて居るといふ意味です。けれどもレールが續いて居るから、こゝで止つていゝといふそんな筈はない、止つてしまつては續いた甲斐がない、だから止らないで終局まで行かなければならぬ。そこで「攝受」と「折伏」の教が起つて来る。「攝受」といふのは、お前のやつて居ることは善いから、その善い事を續けて行つて、モツと完全にしろといふ教。「折伏」といふことは、お前のやつて居ることは間違つて居るから、その間違を直してモツと善い道に入れといふことです。併しそれが結局歸着するところは同じであつて、お前は今横濱に居るけれども、横濱に居るのが悪くはないぞ、併しお前の乗つて居るレールは京都まで續いて居るといふ、それ

が攝受です。併し横濱に滞在して動かずに居つては困る、先へ行けといふのが折伏です、結局同じことになる。ところが日蓮聖人が折伏を主にして、あの時代の人間の眼を覺ますやうに大に活動されたものですから、日蓮聖人の流を汲む人々は、攝受と折伏とは別物と思つて居る、これは大間違です、別物ではない。攝受は、お前のそのレールが最後まで續いて居るぞといふ意味の教。折伏は、續いて居るけれども、そこに止つてはいけないぞといふ教だから、その間に聯絡があるわけです。ですからモウ少し言へば、折伏する人は攝受し得る人でなければならぬといふ議論が出て来る、徳を以て人を感化する力のある人が、人の過ちを指摘することの出来る人なんぞ、人を感化することの出来ない人間が、たゞ過ちだけ指摘するならば、それは折伏でも何でも無い、喧嘩です。甚だ悪い事を言ふやうですが、日蓮宗とか法華宗の人がどうも喧嘩になつて困る、「俺等は法

華だ、貴様は賢者だ」と言つて喧嘩してしまふ。折伏といふことは人を突き落とすといふことではない、人を引上げるといふことではなければならぬ、梯子段の途中に居る人に向つて「なんだつてそんな所にぐさぐさして居るのだ、早く上つて来い」さう言ふのが折伏です。それを梯子段の途中に居るのを突き落とすのが折伏と思ふならば、それは大變な間違で、決して突き落とすのではない、引上げるのです、それを間違へてはいけない。教を説く場合に、人を突き落さうといふ教はない、みな引上げる教です、引上げるためには、時に依れば激しい言葉も使ふし、時に依れば「この馬鹿野郎」と言つて嘔鳴りつけることもあるでせう、馬鹿野郎と言ふのは追ひ落とすことではない、眼を覺まして内に連れ込むことである。ですから慈悲心が現はれたものでなければ教といふものにはならない、そこはよく考へなければならぬこととせう。どうもその根本を好い加減にして置い

て形の方にばかり走り過ぎますと、教を説きましても初めの教とはまるで違つた道を歩いて行くやうな結果になつてしまふのであつて、それは餘程慎まなければならぬことであります。さういふことを茲にハッキリ言つてある、これを讀んで見れば、どれも一つの所に來るのだぞといふことを斯んなに叮嚀に言つて居られる、それを「來るな〜」と言つて、みな押し出すやうなことをやつて居るといふことになつては、佛様の仰しやることはいまるで違ふ。佛様は繰返して言つて居る、「それでも一つ所に來るのだ、早く來い〜」と言つて居られる、その佛の大慈悲心をよく味はなければならぬ。是の法も皆一佛乘の爲の故なり。是の諸の衆生の、諸佛に従ひたてまつりて法を聞かんも、究竟して皆一切種智を得たり。

(是法皆爲二佛乘一故 是諸衆生 從二諸佛一聞法

こゝに「一切種智」といふ言葉を使つたのが面白いのでありまして、一切智といつても宜い。一切智といふのは、一切の事の眞實の相を極め盡す智慧であります、だから佛の智慧のことを一切智と言ひます。或は一切種智とも申しますが、一切種智といふ時には、一切の物の根本を知ると共に、その一つ一つの程度のもの、心持まで推察が出来る、だから一切種智といふ。これは人を教へる上に於ては極めて大事な事です、自分が偉くなつてしまふと、他を「彼奴はつまらないナ」と斯う見下すやうな気分になる、それはいけない。自分は梯子段の十段上まで上つたのだが、九段目に居る人は斯んな心持だらう、八段目に居る人は斯んな心持だらう、下の段に居る人は斯んな心持だらうと、それ／＼の境界を推測して、同情して、それを上まで引上げてやるといふこととでなければならぬ。それだから一切種智でありま

す、一切の根本を知ると共に、その途中の一々の過程にあるものまでもよく解る、それはなかく難かしい事でせう、自分が少しばかり解つてしまふと、途中でぐす／＼して居る者が面倒臭くなる。佛様はそんなことはない、ですから一切種智を得るといふ又佛の智慧、佛のお覺りといふものは、千萬年を通じて變らないものでありますから、その事を更に述べられる。

舍利弗、未來の諸佛の、當に世に出てたまふべきも、亦無量無數の方便、種種の因縁、譬諭言辭を以て、衆生の爲に諸法を演説したまはん。是の法も、皆一佛乘の爲の故なり。是の諸の衆生の佛に従ひたてまつりて法を聞かんも、究竟して皆一切種智を得べし。

(舍利弗 未來諸佛 當に出に於世 亦以無量無數方便 種種因縁 譬諭言辭 而爲衆生 演説諸法 是法皆爲一佛乘 故 是諸衆生 從佛聞法 究竟皆得二切種智)

今の時代だけではない、これから後の世にも佛がお出になるであらうが、その後の世に出られる佛様も、無量無數の方便を以て、種々の因縁とか、種々の譬諭とか、種々の言葉を費して、衆生のためにいろ／＼な法をお説きになる、その未來の世にお説き

聞けるも、究竟して一切種智を得。

(舍利弗 現在十方 無量百千萬億 佛土中諸佛世尊 多所饒益 安樂衆生 是諸佛 亦以無量無數方便 種種因縁 譬諭言辭 而爲衆生 演説諸法 是法皆爲一佛乘 故 是諸衆生 從佛聞法 究竟皆得二切種智)

になる事も、みなこれは一佛乘のためである、やはり衆を佛の境界に到達せしめようといふ、この目的のために説かれるのである。それからその教を聞く者、佛に従つて法を聞いてだん／＼と修行して行けば、結局一切種智を得るだらう。今の時代ばかりではない、未來の世に於てもさうである。

舍利弗、現在十方の無量百千萬億の佛土の中の諸佛世尊の、衆生を饒益し安樂ならしめたまふ所多き、是の諸佛も、亦無量無數の方便、種種の因縁、譬諭言辭を以て、衆生の爲に諸法を演説したまふ。是の法も皆一佛乘の爲の故なり。是の諸の、衆生の、佛に従ひたてまつりて法を

又現在の世もその通りである、現在お釋迦様がこの娑婆世界に出られて教を説かれたが、娑婆世界ばかりではない、十方の無量百千萬億といふやうな廣い佛土の中に於て、いろ／＼の佛様が衆生の人間を饒益し安樂ならしめる、だん／＼利益を増してその心を平らかにして、有ゆる煩惱、有らる苦惱を脱し終らせるといふために教をお説きになるのであるがその佛様の種々の方便、種々の因縁、譬諭言辭等を以て大勢のために教をお説きになる、その法も亦やはり一佛乘のために衆を佛と同じものにしたと思ふのである。だから大勢の人間が佛に成つて結局みな一切種智を具へるやうになるだらう。

斯ういふわけで、時代を言へば過去から、現在から、未來に亘つて、場所を言へばこの娑婆世界ばかりではない、十方の世界のどこへ行つても、佛の説法といふものは結局一つである。

舍利弗、是の諸佛は、但だ菩薩を教化したまふ佛の知見を以て衆生に示さんと欲すが故に、佛の知見を以て衆生を悟らしめんと欲すが故に、衆生をして佛の知見の道に入らしめんと欲すが故なり。

(舍利弗 是諸佛 但教化菩薩 欲以佛之知見示衆生 故 欲以佛之知見 悟衆生 故 欲令衆生 入佛知見道 故)

諸佛はたゞ菩薩を教化して、佛の知見を衆生に示さんと欲し、佛の知見を衆生に知らしめんと欲し、又大勢の人間を佛の知見の道に入らしめる、結局は佛と同じものにしてやりたいといふ心持で、そのために世の中に教をお説きになるのである。

こゝでチヨット脱線するやうであります、申し

て置きたい事は、衆が佛と同じになつたらどうなるか。よく世間でそんなことを言ひます、「衆が佛になつてしまつたら世の中はつまらぬではないか、みんな同じものになつて、少しも變らない、人間はいろいろ違つて居るからいゝのぢやないか、佛に成つてしまつて、衆が同じ顔をして、同じ心持になつて、同じものになつてしまつたら、チツトモ世の中は面白くも何ともない、結局どうなるのだ」といふやうなことを言ふ人もあります、又世間ではそんなことを考へて居るやうです。現に世間の俗語で「佛様のやうな人だ」といふのは碌な人はない、人が嘘をつけば直ぐだまされるやうな人を「あの人は佛様のやうな人だ」と言ふ。だまされるやうな佛様なら、佛様といふものは洵にくだらぬものです、それは一體どう考へたらいいか。その事に付て唐の妙樂といふ人がよく説明をして居ります、丁度骨を折つて佛性を發揮させるといふことは、鑛山から鑛石を集め

て、それを碎いて純金を採るやうなものだ、精金と言つて居りますが、いろ／＼その混つた物を取り去つて金だけにしてみよ、斯ういふことが成佛といふことだ。併ながら金だけにしてみよつて、金の塊をその儘にして置くことぢやない、純金を得られさへすれば、その純金は何でもなるぢやないか、髪の毛の飾りにもなるだらう、腕の飾りにもなるだらう、家の飾りにもなるだらう、有ゆるものになるのだ。人間が迷ひがなくなつて佛のやうな智慧を具へることになれば、ごこの地位に居つても、どんな所に居つても、それ／＼の使命を果して、それ／＼一番完全な行ひが出来るのだ、それが佛の智慧を具へるといふことなので、決して金にして、金の塊で置いておくといふことではない。斯う言つて居りますが、洵にその通りであります。

それですから私共が迷ひを除いて、若し佛に近くなつたとしても、その佛に近くなつて、佛のやう

な慈悲心を以て一切の人を濟はうといふ、その濟ひ方、働き方は、種々の境界、種々の場合、種々の事情に依つてみな違つていゝわけです、決してみな同じことをして居るといふわけのものではない。純金になつたら純金が耳の飾りにもなるだらうし、指輪にもなるだらうし、時計にもなるだらうし、いろいろになつていゝ、たゞそれが純金でありさへすればいい、他の物が混つて居れば錆が出たり、細工が巧く出来ないだらうけれども、純金でありさへすればどんな細工も出来る、どんな光も出るわけでありませう。それですから前にも言つたことがあります、佛が佛に成らない前に願を掛ける、願を掛けるといふのは、自分は一生涯これだけの事をしたといふことを誓ふのであります、その願にはいつでも總願と別願がある、總願といふのは、苟も菩薩の行を續ける以上は必ず持たなければならぬ願がある。それは誰でも知つて居るやうに四つあります、即ち

衆生無邊誓願度
煩惱無數誓願斷
法門無盡誓願學
佛道無上誓願成

有ゆる人間を濟はう、有ゆる煩惱を除かう、有ゆる道を學ばう、さうして佛の境界に必ず近づかうといふ、四つの願がある、それが總願であります。その總願の外に別願といふものがある、阿彌陀如來には幾つかの願がある、藥師如來には幾つかの願があるといふやうに、その廣大無邊な智慧と慈悲とを以て自分は特にこの方面に力を用ひて、この方面の人間を濟つてやらうといふことをみな考へる、それを別願といふ。それですだから佛になるのは容易ではないが、吾々が佛になる修行をするのでも、それぞれの境界に應じて別願を立て、宜しい。少し亂暴な事を言ふやうですが、佛敎が日本に弘まつて後に、その方を軽く視て居つたといふことが、佛敎の衰頽を

ばならぬと思つてやる、歐羅巴などで日曜學校をやるといふと、こつちもやる、向ふで幼稚園をやるといふと、こつちでも真似をする、向ふが滿洲へ發展するといふと、こつちも滿洲だと言つて慌て、出掛ける、斯ういふやうに落付きがない。自分の今歩いて居るこちらから真直ぐに佛の道が通つて居るといふことを考へない、何か他の道を探さなければならぬと思つて、チツトモ落付きがないものだから、そんな風に始終ガタ／＼動いて居るのではないかと思ふ。道はいろ／＼な道がある、いろ／＼な事をやるがい、慈善事業もやるがい、幼稚園も建てるがい、小學校も建てるがい、商賣をするがい、飯を焚くがい、役人を勤めるがい、どの道だつて本當に自分の心の迷ひを取り除いて、一切衆生の爲といふ大きな心持でやつて行くならば、その道がみな佛に成る道に通つて居るのですから、少しも驚くことはありはしない。斯ういふことをシツカリ考

來した一つの原因ではないかと思ふ。みな同じ修行をしなければ佛に成れないといふやうに考へて、商人は商賣を捨て、武士は武士道を捨て、役人は役所を捨て、たゞ一緒に佛經を讀んで、一緒に佛の前でお辭儀をして行けばいいと、斯ういふやうに教へたのが抑々の間違なのであります。さうではない、心持はさうであるけれども、その佛に成る道といふものは、それ／＼役所でも出来る、店でも出来る、町でも出来る、村でも出来る、種々な道からその道を選んで行くといふやうにならなければ、本當に行くものぢやないだらうと思ふ。

又自分が一つの道を選んでそれで押し進んで行くならば、必しも彼れ此れとあせる必要はないのであつて、自分のこの道が佛に成る道だから、喜んで満足してやつて居つたらそれでいいわけですが、日本の佛敎はそこに安心がない、だから歐羅巴で宗敎が慈善事業をやつて居るといふと、こつちもやらなければならぬだらうと思ひます。

それが究竟して一切種智を得るといふことでいろいろな事をやつても結局同じところに行くのではないか。結局同じところに行くといふことは、道は違つても構はぬといふことです、そこをシツカリ考へなければならぬ。「究竟して」とある、究竟するまではいろ／＼な道がある、それはその人々の境遇で種々な修行の道を通つていろ／＼にやつて行つたらいいでせう、さういふやうなことを本當に自分達の毎日の生活に結び付けて、現實に考へる必要があると思ふ。宗敎の事柄と自分の毎日の生活と離れん／＼にして考へるならば、それはやはり一種の戲論です。佛敎以外の事を言ふばかりを戲論といふのではない。假令佛敎を學んで居りましても、自分の實行と離れて考へるならば、それはみな戲論、上ツ調子の話になつてしまふ、そこは餘程シツカリ考へなければならぬ事でありませう。それだから衆生のために有ゆる

時代の佛様、又有ゆる十方の世界の佛様は、みな同じ目的のために教を説いて居られる、といふことをよく説かれて居るのであります。

舍利弗、我も今亦復た是の如し。

(舍利弗 我今亦復如是)

釋迦牟尼佛が世に出て今教を説くのは、やはりそれである、だから自分の言ふ事が、釋迦牟尼といふ一つの佛の教と思つてはいけない、有ゆる佛の説かれた教と自分の教は同じである、有ゆる時代に説かれた教と自分の教と歸着するところは同じだ、斯ういふのであります。

諸の衆生に、種種の欲、深心の所著有ることを知りて、其の本性に隨ひて、種種の因縁、譬諭言辭、方便力を以ての故に、而も爲に法を説く

(知諸衆生 有種種欲 深心所著 隨其本性 以種種因縁 譬諭言辭 方便力故 而爲說法)

目の前を見ると種々の欲があつて、人々の欲はみ

な同じではない、深心の所著といつて、心の奥からいろ／＼執着がある。「深心の所著」といふ言葉は面白い言葉であります、言換へれば、習氣が脱けない間は、深心の執着が脱けない。腹は立てない、併し腹を立てさうな氣分がまだ脱けない、金は欲しくない、併し欲くなりさうな氣分が脱けない、それが習氣といふことです。だから心の上ツ面の執着がなくなつても、腹の底からの執着といふものは、なかなか容易になくなるものではない。人間の執着といふものはなか／＼恐ろしいもので、心の奥の奥から執着があるのですから、そこまで取り去らなければ本當に執着を除いたとは言へない。それで心の奥からの執着があるから、それを佛はよく見抜きましてさうして衆凡夫であるから、それに適切な教を説かれるのであります。併ながらその本性に従つて説かれる。

こゝを二つに分けて見ないといけない、みな心の

のである。

舍利弗、此の如きは、皆一佛乘の一切種智を得

せしめんが爲の故なり。

(舍利弗 如此皆爲得一佛乘 一切種智故)

そこで繰返して今言つた通り、自分の五十年間に説いた事は、一佛乘といつて、みな佛に成るといふ教だ、一切種智といつて、有ゆる人の境界を照し見て、すべての人を濟ふやうな力を具へさせるさういふ大目的のために自分は教を説いたのである。

舍利弗、十方世界の中には、尚ほ二乘なし、何

に況や三有らんや。

(舍利弗 十方世界中 尚無二乘 何況有三)

底に執着があるから、その執着を捨て、けれども本來は佛になるやうな性質を有つて居る。これは二つに見別けないといけない、迷ひがある、迷ひは非常に根深くある、根深くあるが、その迷ひだけではなくして、その迷ひに閉ざれて居る心の一番奥には本性といふものがあつて、小さい自分を捨て、人と共に生きたいといふ本性がある、だからその本性に従つて教を説いて行くと、その心の表面に浮いて居る迷ひといふものはだん／＼消えて行く。その本性といふのは所謂佛性であります、佛と同じ性質であります。小さい自分を捨て、他の者と共に生きたい、小さき自己を全く離れて行くといふその本性、その本性が人間みな誰にもありますから、それに基いて種々の因縁、譬諭言辭、方便力を以て教を説くのである。その教を説くのは何のために説くかと言へば、衆を佛にしたい、お前達の有つて居る本性を完全に發揮しろといふ、その意味で教を説いて居る

「尚」ほといふのは勿論といふことで、この娑婆世界は勿論、十方の世界のどこへ行つても、二乗といふ二種の教はない、まして三種なんといふ教はないぞ、みな一つだ。低い教を説いても、その低い教からだん／＼深入をして結局佛の境界まで行かせるこ

いふこの目的のために教を説いて居るのだ。教が二種も三種もあつて堪るものではない、十方の世界に於てさへその通り、ましてこの娑婆世界に於て二種も三種も教のあるわけがない。だから今のお前達の教は低い方の悟りもあるだらう、深い方の悟りもあるだらうが、結局一つになつて、佛の境界に近くまでは骨折を止めまいといふ大決心を持てといふ、それが大乘の教であります。大乘といふことは外にはない、佛に成らうといふことです、それ以外に大乘はない。いろ／＼細かに言へば際限がないが、結局大乘といふのは佛に成らうといふことです、佛に成らうといふことは小さい自分をスツカリ捨て、一切衆生と苦を俱にし、樂を俱にしようといふことです、それより外に大乘といふものはない、その外のことはその場合／＼に依つて説明するけれども、結局それです。ですからみな一緒になれ、小さい自分を捨て、行けといふ、それをこゝにハッキリと言つ

てある。「何に況や三有らんや」で、三種なんぞありはしない、今まで聲聞、縁覺、菩薩と三種になつて居つたけれども、その三種といふのは結局一つに歸着するのであつて、衆が佛と同じになれるといふその大決心を起すことなのである、斯う言はれたのであります。

でありますから、これは釋尊の世の中に御出現になつた目的を明にされると共に、釋尊の教といふもの、値打を明にされたのである。吾々は凡夫ですから疑深い、私共はバイブルを讀んだことがある、論語も讀んだことがある、論語もバイブルも善いと思つた、さうしてお經を讀んで見ると、お經の方が善い、味つても、論語やバイブルよりはお經の方が勝れて居るから、佛教が有難い、斯う思ふ。併し吾々は凡夫なんです、だから佛教よりはまたモツといふものがあつたら、これを廢めて「外に善いものがあるかも知れぬ」などと、尚に大膽千萬な話ですが、

そんなことを考へて見る、併しお釋尊様はさうは仰しやらない、絶對の眞理といふものは一つしかない一番が二つあつては一番になりはしない、一番良いものといふものは一つしかない。そこで釋尊は衆を佛にしようといふ心持で教を説かれたのですから、有ゆる佛が出て、いろ／＼の言葉でいろ／＼に説いても、結局はこゝに歸着する、だからこの釋尊の教に就て眞心を以て修行して行きさへすれば、千萬年後になつてどんな偉い人が出て教を説いても、それは少しも違ひはしないぞといふことをハッキリ請合つて下さつたのでありますから、こゝで初めて吾々は安心して信仰が出来るわけであります。これは佛にして初めて出来ることであります。

でありますからこの方便品を、釋尊一代の説法の目的を説くのだと解釋して居るのは、徹底的のやうでまだ／＼淺薄なのであつて、釋尊一代の教ではない、如何なる教、如何なる道でも、結局歸着する所

は一つであつて、二種も三種もないぞ、千萬年に亘つて變らない道があるぞといふことを明かにされたのであつて、そこに非常に尊いところがあるのであります。

そこで千萬年に亘つて變らない道があるのは何故だといふ疑問がそこに起る、その疑問を發すのが「壽量品」であります。それは千萬年に亘つて變らない生命のあるところの佛がすべてを護つて居るのだから、その教といふものは結局一つのものではないか、斯ういふことになるので、方便品と壽量品とが遠く相照して、さうして人間のすべての教が一つにならなければならぬといふことを、シツカリと土臺を固めるわけになるのであります。だからこゝをこゝだけ讀んで、さうして今度は後の壽量品に行きますと、その方便品で言はれた事がヒシ／＼と思ひ當るやうになつて行くわけです。

日蓮聖人が、特に壽量品のみに力を盡されたやう

に思ふのは、それは淺薄な見方であつて、支那の天台といひ、日本の傳教といひ、方便品の意味を發揮することに於て遺憾がないのです。だから日蓮聖人は、あの人々が方便品の意味を發揮することに於て哲理的に遺憾なく説かれたが、それは壽量品に説かれた一つの佛様の力の現れである、この一つの點を知ることによつて、今までの説明がみな活きて來るぞ、斯ういふ意味で、日蓮聖人は壽量品に力を入れられたのです。ですから壽量品さへあれば、他の品ははどうでもいふのではない、それは天台や傳教の書物を読んでから、日蓮聖人に移りますと、ハツキリそのところが解ります。

私共はこの述門の方の方便品と、本門の方の壽量品と相照し、相俟つて、佛教ばかりではない、人間道、人間の教といふものが歸著して一つになるべきだといふ大きな確信を與へるものだといふやうに考へて、讀んで行つたらいとと思ひます。(此講了)

編輯室より

○信佛の必要であることを認めつゝ其の對象に關する不透明から、折角の尊い心持ちも却て罪業を増すことなる懼れが多々あります。そこに先師の御苦心の程が窺はれるでしょう。宗門の道俗にして其の本尊意識を嚴格に詰問する時に、轉た寂莫を感じざるを得ないのであります。爰に鑑みる所あつて前號からこの本尊意識に就て極めて重要な教材を抽出することに致しました。

○紙面がなくなつたので、本部圖報や各地教信を次號に譲らせて頂きます。

○いよ／＼秋のお彼岸に近づきました、本部會館の講堂内部が、大層感じのよい信佛道場化されましたと好評を博してゐますから、是非御實見お願申上ます。

寄附金維持及團費誌料領收

(自六月二十一日) (至八月二十一日)

一 金壹圓貳拾錢也	大阪 小園 三平殿	一 金壹圓貳拾錢也	鳥根縣 長岡 義貞殿	一 金貳圓也	東京 清水 敏三殿
一 金貳圓貳拾錢也	東京 長谷川義一殿	一 金壹圓也	岡山 高矢 惠教殿	一 金壹圓也	東京 齋藤 リイ殿
一 金貳圓五拾錢也	同 上田 晏弘殿	一 金貳圓也	東京 小峰 豐子殿	一 金參圓也	同 大原 行道殿
一 金貳圓五拾錢也	同 内倉 治吉殿	一 金拾圓也	盛岡 小林 茂雄殿	一 金貳拾圓也	同 柴田 武治殿
一 金五圓也	横濱 足月 宜壽殿	一 金貳圓貳拾錢也	福岡縣 大石 千尋殿	一 金拾圓也	同 清水美佐子殿
一 金貳圓貳拾錢也	三州 武藤 照惠殿	一 金貳圓五拾錢也	名古屋 石田よしの殿	一 金貳圓也	同 加藤直太郎殿
一 金貳圓四拾錢也	静岡縣 山本 通辨殿	一 金參拾圓也	東京 酒部彌太郎殿	一 金壹圓貳拾錢也	奈良縣 出口馬太郎殿
一 金貳圓六拾錢也	尼崎 植村藤次郎殿	一 金貳圓貳拾錢也	大阪 富田 清子殿	一 金貳圓貳拾錢也	大阪府山乃神傳道園殿
一 金貳圓貳拾錢也	萩 梅屋 勇助殿	一 金貳圓貳拾錢也	福岡縣 横山 正三殿	一 金貳圓貳拾錢也	同 小田原 三橋 會要殿
一 金貳圓貳拾錢也	山口縣 荒木 フル殿	一 金貳圓貳拾錢也	東京 福原 脩殿	一 金貳圓五拾錢也	横濱 荒木 蓮成殿
一 金貳圓五拾錢也	東京 安江 清海殿	一 金拾圓也	同 羽下 修三殿	一 金貳圓五拾錢也	同 中村 美津殿
一 金壹圓貳拾錢也	同 万城 登殿	一 金五圓也	同 寺澤 信平殿	一 金貳圓貳拾錢也	同 中村 美津殿
一 金壹圓貳拾錢也	同 泰山 春吉殿	一 金參圓也	同 井上道太郎殿	一 金貳圓貳拾錢也	東京 池澤 泰明殿
一 金貳圓貳拾錢也	横濱 岩上油三郎殿	一 金貳圓貳拾錢也	同 前田 良吉殿	一 金七圓也	同 鈴木 薰殿
一 金壹圓貳拾錢也	同 京田爲太郎殿	一 金五圓也	大阪 西川 寅吉殿	一 金六圓也	同 小高 與吉殿
一 金貳圓貳拾錢也	同 神原 重吉殿	一 金貳圓貳拾錢也	同 相馬布佐衛殿	一 金壹圓貳拾錢也	千葉縣 渡木 博殿
一 金五圓也	愛知縣 神原 重吉殿	一 金貳圓貳拾錢也	名古屋 瀧定合名會社殿	一 金八拾錢也	東京 津川 英吉殿
一 金五圓也	東京 寺澤 萬三殿	一 金貳圓貳拾錢也	東京 川添 道揚殿	一 金五圓也	同 山田 英二殿
一 金五圓也	横濱 里井 巖殿	一 金貳圓貳拾錢也	同 河本 梅藏殿	一 金七圓也	同 石綿 孝至殿
一 金五圓也	門司 河瀬 由子殿	一 金貳拾圓也	市川 毛見 春吉殿	一 金貳圓貳拾錢也	大阪 水野 榮子殿
			立正會殿	一 金貳圓五拾錢也	神戸 森岡 正男殿

一金壹圓貳拾錢也	東京	新井 順三 殿
一金參圓也	同	何 某 殿
一金參圓也	同	何 某 殿
一金貳圓貳拾錢也	同	宮島 榮一 殿
一金貳圓也	横濱	松田 常榮 殿
一金壹圓貳拾錢也	福岡縣	秋山 照代 殿
一金壹圓貳拾錢也	京都	有田 宏道 殿
一金壹圓也	東京	小峰 豊子 殿
一金貳圓五拾錢也	同	須藤 倫吉 殿
一金壹圓貳拾錢也	千葉縣	中村 正治 殿
一金貳圓也	東京	沼部 彌太郎 殿
一金六拾錢也	大阪府山乃	沼部 彌太郎 殿
一金壹圓貳拾錢也	萩	石山 敬 殿

右難有入帳仕候也

財團法人統一團 會計

念 告

本誌の紙數増加と共に製本にも郵送にも經濟影響ですから、誌料は何卒前金にお願致します。正團員の團費は誌料と混同せぬやう年額金貳圓五拾錢ですから乍悉縮滞りなきやう御拂込願います。

財團 統一團

お知らせ

● 八月中の三十日間を費して、竹田組力石氏の御誠意に依り會館の内外共に皆様の御希望に添ふべく大改造が加へられましたから、御通過の節は是非お立寄り下さい。
● 法華經講座は毎週木曜日晚七時より開かれます、目下觀音經です。
● 日曜日集會は毎日曜日午後二時から、涼しい講堂で信仰を養ひませう、お誘ひ合せ御來館お待ち申上ります。

本多日生上人著書特價提供

聖 語 錄	改 版	送特 送料共	金壹圓八拾錢
法華經要義	賜天覽	全	金貳圓五拾錢
日蓮主義心髓		全	金壹圓五拾錢
日蓮主義精要		全	金貳圓九拾錢
佛教の本質と其價值		全	金貳拾五錢
法華經要品		全	金五拾錢
日生上人レコード		全	金參圓廿五錢
日蓮聖人		全	金拾錢

河合彰明著
皇道と日蓮主義
本多日生上人
勤行作法
送特 送料共
金壹圓七拾錢
金拾錢

月刊「教」誌

申込所

東京市小石川區音羽町六ノ一七

「教」

發行所

振替東京一〇九四〇番

東京市小石川區音羽町六ノ一七
財團 統一團 出版部
振替東京九四〇番

一册 金貳拾錢 送料壹錢
半ヶ年 金壹圓貳拾錢 送料共
一ヶ年 金貳圓貳拾錢 送料共

注意
●御申込ハ總テ前金ノ事
●前金相切候節ハ包紙ニ其旨表示可
●御轉居ノ場合ハ必ず折舊共直ニ御通知ノ事

昭和十年八月廿四日 印刷納本
昭和十年九月一日 發行
(第四百八十六號)

東京市小石川區音羽町六ノ一七
編輯兼 發行所 磯部 滿 事
印刷人 鈴木 日 雄
東京市品川區南品川二ノ一八一
印刷所 都 印 刷 所
電話高輪六〇二四番

發行所 財團法人統一團
東京市小石川區音羽町六丁目一七
電話牛込五三三六番
振替東京九四二〇番

統

一

財團法人
統

團發行

目 次

本 尊 論 (中篇)	聖應院日生
人生と法華經 (其三)	池ノ内三雄
床次遷相を悼む	磯部満事
法華經講話 (第二十二講)	小林一郎
比叡山上宗教教育講習會の記	河合 渉明

○本部團報各地教信 ○寄附團費誌料領收

號月十 年十四第

